

先進プロジェクト研究2015年度 研究活動報告書

「社会科学の理論的・哲学的基礎の探求―批判的实在論を参照点として―」

2015年度 担当教員 ; 佐藤春吉、木田融男、松田亮三 (前期)、杉本通百則
受講生 ; 野村 優、中澤 平、大月功雄、石 宸、溝口翔太
(2014年度担当教員 ; 佐藤春吉、木田融男、松田亮三
受講生 ; 野村 優、中澤 平、赤松千代、足立弦也)
(2013年度担当教員 ; 佐藤春吉、松田亮三、加藤雅俊
受講生 ; 野村 優、中澤 平、大月功雄、赤松千代)

目次

I. はじめに

1. 本プロジェクト研究の目的
2. 本研究の意義
3. 本プロジェクトの研究計画概要

II. 本プロジェクト研究の活動経過および研究成果の概要について

1. 過年度の研究経過とその成果
 - 1) 2013年度
 - 2) 2014年
2. 2015年度の研究経過とその成果

III. 研究内容

1. 今年度研究内容の概略
2. 『社会を説明する』(“*Explaining Society*”)の輪読と翻訳作業
 - 1) 個人研究の促進とその成果の公表
 - 2) 国際交流企画報告、講師講演原稿の『産社論集』特集への掲載
 - 3) 「先進プロジェクト研究」授業の取り組み
 - 4) 批判的实在論研究会の活動
 - 5) 批判的实在論研究のネットワーク形成について

IV. 2015年度研究内容

本プロジェクト研究参加者の研究内容と成果 (報告レジメ等資料を含む)

1. 佐藤春吉 (担当教員)
2. 木田融男 (担当教員)
3. 杉本通百則 (担当教員)
4. 松田亮三 (担当教員)
5. 野村 優 (受講生 ; 博士後期課程3回生)
6. 中澤 平 (受講生 ; 博士後期課程2回生)
7. 大月功雄 (受講生 ; 博士後期課程1回生)
8. 石 宸 (受講生 ; 博士前期課程2回生)
9. 溝口翔太 (受講生 ; 博士前期課程1回生)

付録 ; 「特集 批判的实在論研究」『立命館産業社会論集』(2016年3月 第51巻、
第4号 通巻168号)

<http://www.ritsume.ac.jp/ss/sansharonshu/2015/514j.html/>

I. はじめに

本プロジェクト研究は、2015年度をもって3年間継続した研究活動の第1段階の区切りを迎えることになった。2016年度に開始した本プロジェクト研究は、3年目を終え、着実な成果を生み出してきたといえる。プロジェクト研究参加者の研究の進展はもとより、産業社会学部50周年記念学術企画として取り組んだ国際交流企画の成功や翻訳書（ダナーマーク他著『社会を説明する』ナカニシヤ出版）の刊行、産業社会学会の紀要『産社論集』に「特集「批判的实在論研究」を企画編纂し7本の論稿を集めるなど、成果公表と社会的な発信も着実に行ってきた。この間、担当教員や受講院生の変動などもあったが、本プロジェクト研究を中核にして、それと密接に連動して進めている研究会活動は徐々にその規模を拡大しつつ継続的な発展をみている。また、2014年度に行った国際交流企画と『社会を説明する』の刊行を契機に、広く学内外から批判的实在論への関心を集め、国内の研究者との連携も生まれつつある。こうした成果を踏まえ、メンバー一同、この3年間の取り組みをさらに継続させ、そのプロジェクト研究のいっそう高い目的の実現のために、さらに活動を発展させていく所存である。

以下は、2015年度単独の報告という意味を超えて、3年間全体のまとめを意識して報告するものである。

1. 本プロジェクト研究の目的

本プロジェクト研究の目的は、社会科学の研究を導く基礎となるメタ理論が見失われつつあるという社会科学の危機に対応して、正面から語られず暗黙の内に前提されている社会科学における存在論や認識論といった基底的問題にたいして自覚的な反省を行い、応用力のある社会学の基礎理論を提案している「批判的实在論（critical realism）」を参照点にして、その理論を理解し批判的に検討しつつ、自らの研究に確かな指針を与える可能性を探究しようとするものである。

本プロジェクト研究では、まずは、批判的实在論の概要を理解し、その意義と限界を批判的に吟味し、各自の研究に活用していくための学問的基礎を構築していくことを当面の目的としている。つまり、本プロジェクトは、各自が進める研究とは関係のない別の研究をするのではなく、それぞれ自らの学問領域においてオリジナルな研究を進めるなかで、批判的实在論が提起する思考法や方法論から学び取り、これと対話しつつ、各自の学びと研究法を反省的にとらえ返し、実際の研究に生かしていくことをめざしている。その作業は各自の個別のテーマとの関係で一律同質のものではなく、短時日に完結するものでもない。したがって、息長く様々な問題に関心を寄せながら長期的な視野で研究を進める必要を自覚している。

また、本プロジェクトでは、まずはそうした哲学的な問い直しの意義を共通認識にして各自の研究進化のための知的基盤を鍛えることを当面の目的としている。また、より広くは、我が国ではまだ十分知られていない批判的实在論について紹介し、研究者の潜在的な関心の掘り起こしと共同研究の可能性の追求をも目指している。本プロジェクト研究の成果を発信することによって、我が国の社会科学研究において科学論や方法論についての反省と考察の機運を醸成し、社会科学刷新に向けた問題提起をしていくことも、遙な目標の一つとしている。

なお、本プロジェクト研究は、本研究科所属教員と大学院生たちによって担われているが、その研究活はさらに学部内外に規模を広げて組織された「批判的实在論研究会」の活動とも密接に連携して活動することとしている。

2. 本研究の意義

社会が複雑化・流動化することにともない、それらを分析対象とする社会科学それ自体も大きな転機に差しかかっている。現在、社会科学の諸領域では、経験主義や実証主義に依拠した従来の学問のあり方に疑問が呈され、刷新を求める動きが生じている。「批判的实在論」は、これまでの社会科学の理論的・哲学的基礎を批判的に検討し、「实在論的存在論 (realistic ontology)」という存在論とそれにもとづく認識論を提唱し、それらのメタ理論に依拠した新たな社会科学を創造する研究構想として、英語圏を中心に、社会学、経済学、政治学など、多くの学問領域で注目を集めている。この理論は、上述の専門分野の基礎理論のみならず、社会福祉や教育、ジェンダー論、メディア論、言説分析、国際関係論や、平和学、組織論など、多彩な特殊研究領域にわたって応用されてきており、専門分野を異にする本研究院生各自の研究にとっても、その理論的支えを獲得する上で益するところが大きいと考えられる。また、批判的实在論の哲学的なメタ理論的性格は、上記の多分野の学問流域を結びつける学際的な知識の統合に指針を与えており、産業社会学部および社会学研究科の研究を支える理念の発展にも役立つものと考えられる。批判的实在論が提起している社会科学研究の方法論や哲学的基礎について反省する作業は、確かなメタ理論を欠き方向喪失状態ともいえる社会科学の現状に問題を提起し、避けられがちなテーマに真摯に向き合う議論状況を作り出すことに貢献をするものとして、将来的にも有望な発展が見込まれるであろう。

3. 本プロジェクト研究の計画概要

本年度は3年間のプロジェクトのまとめの意味をもつことから、以下では、本プロジェクトの3年間の研究計画の概要と2015年度の計画概要を記すことにする。

1) 2013年度

初年度の計画では、以下のような諸点を計画の基本課題として掲げた。①すでに邦訳されている業績、なかでも、批判的实在論の創始者であるロイ・バスカーの『科学と实在論』および『自然主義の可能性』を主たるテキストに、この理論の基礎を理解する。この課題は、連携して展開する「批判的实在論研究会」との共同の課題として位置づけた。②未邦訳の重要な業績で、この理論の優れた概説書でありまた研究者むけに独自の研究方法論を展開している『社会を説明する』(B. Danermark et al. *Explaining Society*, Routledge)を中心にその内容を理解し、批判的に検討する。この課題は、毎週の講義としての「先進研究プロジェクト研究」の中心的な活動に位置づけて進めることとした。③あわせて、同書『社会を説明する (*Explaining Society*)』を翻訳し出版することを今期の活動の重要課題として位置づけた。同訳書の刊行によって、我が国の研究者に批判的实在論の概要や意義についての理解を広め、社会科学研究の批判的反省に向けた問題提起に寄与することを目指すこととした。なお、同書の翻訳については、ナカニシヤ書店が出版を引き受けることとなり、研究プロジェクトと批判的实在論研究会メンバーで翻訳チームを編成し、独自に翻訳作業を進めていくこととした。④各自の各専門領域における研究への応用可能性についても検討し、これらに依拠した個別研究を成果として発信していくことも目標として掲げた。

なお、本プロジェクト研究は、記述のように、この講義とは別に本学産業社会学部の教員院生を中心に他学部教員も参加するかたちで組織されている「批判的实在論研究会」とも連携して研究の質的充実をはかり、共同の活動を展開することとしている。「批判的实在論研究会」は原則月一回、本プロジェクト研究と連動・共同で開催することを基本方針とした。当面は、R. バスカーの『自然主義の可能性』を中心に基礎文献の検討を行い、批判的实在論の基礎的な哲学と社会科学論の理解を進めることとし、状況に依

じて適宜研究者の個人発表にもとづく研究会を開催して行くこととした。

2) 2014年度

2014年度2年目は、研究計画として以下の諸課題を掲げた。①昨年度から準備し、進めていた、Berth Danermark, Mats Ekström, Liselotte Jakobsen, Jan Ch. Karlsson, の共著書 *Explaining Society: Critical Realism in Social Sciences*, Routledge Explaining Society, の翻訳刊行を確実に実現させることを最重要課題とした。翻訳は、本研究プロジェクト担当教員と受講生の他に、本研究科所属教員と院生を中心に組織している批判的实在論研究会と協力して進められた。本年度は、同書刊行の条件となっていた出版助成を産業社会学会よりいただくことが確定し、ようやく出版企画として確定した。なお、同翻訳書は、佐藤春吉監訳（第1章；佐藤春吉、第2章；中澤平、第3章；吉田幸治、第4章；加藤雅俊、第5章；松田亮三、第6章；野村優、第7章；木田融男、第8章；藤田悟 訳）、『社会を説明する—批判的实在論による社会科学論—』（ナカニシヤ出版）として、2015年3月に刊行された。②本年度の取り組みの第2の重点課題は、本プロジェクトと上記批判的实在論研究会が中心となり、2015年度の本学産業社会学部創設記念学術企画として批判的实在論研究の国際研究交流企画を実現することであった。具体的には、同書 *Explaining Society* の著者のうちの2名（Berth Danermark 教授 Jan Ch. Karlsson 教授）を招いて講演と討論および研究交流の会を開催することにした。これによって、ひろく我が国の研究者に批判的实在論を紹介し、その関心を喚起し、研究の新しい方向性を示すこと、各地に散在している批判的实在論に関心をもつ研究者の連携をはかり、さらなる共同の足がかりをつくること、を目標として掲げた。ちなみに、同企画は、学部創設50周年記念事業委員会の事業予算からの支援と人文科学研究所からの研究支援を得て、11月6日、7日の2日間にわたって開催され、成功をみた。③本プロジェクトの通常の定例講義としては、昨年度から継続として特に前半期は *Explaining Society* の読み合わせをすることとした。④この他に、昨年度以来、批判的实在論研究会と合同でロイ・バスカーの『自然主義の可能性』（式部信訳、晃洋書房）について検討する作業を積み重ねてきており、2014年度前期も引き続きその課題を継続することとした。④なお、各人の批判的实在論への基礎的な理解が確実に前進してきていることから、本プロジェクトの成果を生かして、各人の研究テーマに反映させた研究の発展に役立てていくこと、その成果公表の具体的な目標が実現可能な課題として見通せる状況になってきた。次年度の成果公表を目指してさらなる研究を進めることを共通の課題として2014年度の研究を進めることとした。

3) 2015年度

2015年度の研究計画では、以下の諸課題を掲げた。

これまで本プロジェクト研究では、批判的实在論の基礎文献の読解と検討を進め、その哲学的・科学論的な主張の基礎についての理解を継続的に進めてきた。また、前年度までに、翻訳書『社会を説明する』（バース・ダナーマーク著、ナカニシヤ書店刊）を刊行するとともに、国際交流企画を開催実現することができた。批判的实在論研究会とも連携したこれらの活動によって、学内外の研究者との交流や国際的な関係構築も進み始めている。

これらの成果を踏まえて、プロジェクト第1段階の最終年度である2015年度は、以下の課題を進めることとした。①批判的实在論の理解が一定進んできたことをもとに、各人の研究成果を論文等の形で公表することを追求する。具体的には、産社学会の『産業社会論集』に「批判的实在論研究」特集を企画し、同特集の第1部において、担当教

員および受講生を中心に複数の論稿を掲載公表することを目標とした。②前年度に開催した国際企画の報告を公的な形で行うことも2015年度の目標とした。具体的には、同企画の簡単な概要報告とともに、招聘した2人の研究者の講演原稿を翻訳公表し、批判的实在論への関心を喚起し、日本の社会科学研究への問題提起の一助とすることとした。この課題は、具体的には上記の『産業社会論集』の特集第2部として掲載することとした。なお、上記の『産業社会論集』の「特集：批判的实在論研究」の企画は順調に進み、年度末の同誌の2016年3月号において刊行された。③本先進プロジェクト研究には新しい受講者や教員の参加もあった。基礎的な文献講読を継続的に進めることは引き続き重要な課題となっている。そこで今年度の「先進プロジェクト研究」の授業活動では、最初の数週間を使って、3月に刊行された訳書『社会を説明する』の内容について各章ごとに検討し、その内容の理解をあらためて確認し共有する作業を行うこととした。その後は、批判的实在論研究グループの中でも若手に属する中心的研究者である Dave Elder-Vass の著書 *The Reality of Social Construction* (Cambridge University Press, 2012) をテキストとして取り上げ、輪読形式で同書の内容の読解と批判的検討を進めることとした。④昨年度の『社会を説明する』の刊行以降、国内の研究者から批判的实在論に新たな注目や関心と呼び始めている。こうした関心を共有する研究者の緩やかな連携を進め、共同の議論を促進することも重要かつ現実的な課題として浮上してきている。今年度はそうした緩やかな連携の促進をも視野に研究活動の発信についても留意することとした。

II. 本プロジェクト研究の活動経過およびその成果の概要

1. 過年度の研究経過およびその成果

以下は、2013年度および、2014年度の活動経過とその成果についてその概要を記し、あらためてここで確認しておきたい。

1) 2013年度

①テキストの講読と検討。上記したとおり、本プロジェクト研究の毎週の授業時間については、主として上記の英文テキスト B. Danermark et al., *Explaining Society*, Routledge を輪読し、合わせて分担して翻訳作業を進める形式をとった。当初計画では、数章を1回で終えるペースを考えていたが、翻訳を意識して正確な訳を検討したこともあり、また、さまざまな論点について検討するなかで、議論する項目が多く、当初計画が現実的でないことが判明した。前半途中からは、ペースを落として正確な理解を心がける方針に切り替えた。批判的实在論は、その用語が豊富で通常の用法と異なるオリジナルな意味を持つものが多く、訳語の確定や意味内容の正確な理解について特別な注意が求められた。当初計画からは遅れることとなったが、このことによって、理解の深まりが生まれた点は成果として評価される。

②翻訳作業。輪読とは別に、同書の翻訳公刊を目指して、翻訳者と担当章を割り振り、授業進行とは独立して、各自で翻訳作業を進めた。当該年度末までには、全8章の8割ほどの第一次の翻訳原稿がそろった。その後は、次年度の刊行を目指して、未提出の翻訳原稿の作成、提出された訳稿についての見直し、訳語や訳文の適切性についての検討作業を継続して進めた。大まかな訳稿は前年度末にはそろっていたが、なお一部の翻訳作業の進捗の遅れを克服すること、第一次原稿の補正作業が当年度の大きな課題となった。この課題

は、プロジェクト活動と並行して進めることとした。また、後期には上記の国際学術企画の準備（講演原稿の翻訳を含む）と実行の課題があり、これを成功裏に進めることを後期の重要課題として確認した。次節に記すように同企画は学内外からも参加者があり、無事成功させることができた。

③「批判的实在論研究会」と連想した研究会活動。上記のように、本プロジェクト研究と連携させながら、「批判的实在論研究会」を立ち上げ、研究会をおこなっている。本プロジェクト研究の参加者は、同研究会の活動にも参加し、さらに、本プロジェクト研究の目標を達成すべく研究をおこなってきた。同研究会は、当初ほぼ隔週1回のペースで例会を行い、適宜「批判的实在論」についての基本理解をふかめるための活動を行うこととした。研究会の発足にあたって、批判的实在論について、以前からある程度研究を進めてきた担当教員の佐藤春吉より、批判的实在論の考え方の基本骨格について報告し、質疑応答をおこなった。その後は、ロイ・バスカー著『自然主義の可能性』（式部信訳、晃洋書房）を中心にその内容理解と批判的検討を継続して行うこととした。同書は、表題から連想される内容とは異なって、バスカーの社会科学基礎論を展開した批判的实在論の基本文献である。同書の検討会は、毎回議論が白熱し、ここでも当初の予定よりもペースを落とし、内容理解の十全を期す方向に方針を転換した。基本文献の検討は、批判的实在論の基礎的理解にとってはきわめて重要であり、毎回の検討による白熱した討論は、その理解を深めることに大いに貢献した。同研究会は、隔週火曜日に開催する予定をたて、前期はほぼ計画通り進めてきたが、校務その他との関係で参加者の日程調整が難しくなり、後期からは、月1回の定例開催を目標に、水曜日の先進プロジェクト研究に連続させ共同で開催することとした。

④研究セミナー「批判的实在論と対人支援」の開催（2014年2月1日）。人間科学研究所との共催。人間科学研究所「対人援助におけるエビデンス-実践回路研究」ならびに「インクルーシブ社会に向けた支援の〈学=実〉連環型研究」方法論チーム主催の上記セミナーに、批判的实在論研究会が共催する形で、上記セミナーを開催し、先進プロジェクト研究参加院生も参加した。同セミナーは、人間科学研究所の上記研究グループを主催する教員松田亮三が、本先進プロジェクトを担当しており、また批判的实在論研究会のメンバーであることから、企画立案されたものである。本セミナーでは、報告「批判的实在論とは何か？」を本プロジェクト研究担当教員佐藤春吉が、また、報告「対人支援研究における批判的实在論の活用例—医療・福祉を中心に」を同じく担当教員松田亮三が行い、有意義な議論がかわされた。特に、批判的实在論の基礎的な理論研究を超えて、具体的な諸問題への応用に向かう研究が進み始めたことは、本先進プロジェクト研究の進展にとっても、あらたな展望と可能性を開くものとして、有意義であったと言える。

なお、2014年3月26日には合宿を行い、『社会を説明する』の翻訳原稿についての検討会を開催した。毎週の開講授業日程や批判的实在論研究会の開催日程とテーマ・報告者などの詳細は、「先進プロジェクト研究」の各年度まとめに記しているので省略する。

2013年度は、翻訳作業については一定の前進をみたが、まだプロジェクトを立ち上げたばかりであり、参加者各自が批判的实在論の基礎を理解し、自らの研究テーマとの関連を把握し、各自の研究に生かしていく方向性をさぐるものが主眼となった。この点では、着実な前進が見られたと言える。

2) 2014年度

2014年度の先進プロジェクト研究の活動計画については、上述の通りである。ここでは、その研究内容と成果の概略をあらためて箇条書きで示すことにする。

①テキスト『*Explaining Society*』の輪読（毎週正規授業時間、主として前期）

本プロジェクト研究の前期の授業では、昨年度に引き続き、主として英文テキスト *Explaining Society* を輪読し、さまざまな論点について批判的に検討を進めた。昨年度と同テキスト輪読の経験から、分量を稼ぐよりも、テキストの内容的な検討をおこなうことを重視した。プロジェクト研究も2年目となり、並行して進めてきた翻訳の作業や見直し作業も進行しつつあり、批判的实在論の基礎についての内容理解も進み、鋭い質問などで議論は白熱し、議論の内容は確実に深まってきた。後期は、翻訳作業を中心にしたこと、国際企画実施のための準備作業や同企画の運営の課題に重点を移すことになった。

②『社会を説明する (*Explaining Society*)』の翻訳刊行

授業における輪読とは相対的に別の課題として、同書翻訳作業が、各章の翻訳担当者によって遂行された。とはいえ、この作業は本プロジェクト研究の重要課題として位置づけられたものであり、同書の内容理解についてまたその進捗状況について必要な意見交換や、情報を共有しながら進めた。この年度は未提出の翻訳原稿の完成、およびすでに提出された第1次原稿の見直し補正作業が中心となった。すでに前年度末で8割ほどの原稿がそろっていたが、前期中には、ようやく遅れていた原稿もそろい、まずは提出された第1次訳稿の訳語・訳文の適切性に照らした見直し作業を進め、訳語・訳文の点検と基本的な語調の統一を図る作業に集中した。

また、ナカニシヤ書店が出版を引き受けることとなっていたが、大学の出版助成の取得が前提条件となっており、出版助成獲得のための準備、そのための第1次原稿の整備などを進めた。幸い、産業社会学会から助成をいただけることとなり、出版の実現が確実となった。

こうした過程をへて、9月時点では、細部の訳語の異同や訳文の点検と全体の見直しをほぼ完了させ、第1次校正原稿が作成された。これをもとに、各章担当者による再度の検討と校正がおこなわれるとともに、原著者への質問や応答の処理、「用語集」その他の附属部分の翻訳作業が進められた。その後、各章担当者による校正を進め、監訳者が最終校正を行う段取りであったが、この作業の途中で訳者たちを招いた国際学術企画の準備と運営の仕事が入り、校正作業の進捗が遅れがでてしまった。国際交流企画終了後、ふたたび校正作業を続けたが、この過程で、原著者による日本語版序文についてのやりとり、その翻訳、訳注、監訳者後書きや索引作りなど、最後の作業が進められた。結果として、最終校正版組の作業が期限ぎりぎりになってしまった。こうした反省材料はあるものの、最終的には2014年度内の刊行という当初の目標をなんとか果たすことができた。なお、同翻訳書は、佐藤春吉監訳（第1章；佐藤春吉、第2章；中澤平、第3章；吉田幸治、第4章；加藤雅俊、第5章；松田亮三、第6章；野村優、第7章；木田融男、第8章；藤田悟 訳）、『社会を説明する—批判的实在論による社会科学論—』（ナカニシヤ出版）として、2015年3月に刊行されている。

③批判的实在論の基礎についての理解と検討；「批判的实在論研究会」との連携

批判的实在論の基礎的理解を深める課題は、通常「先進プロジェクト研究」の授業と重なる形で開催する「批判的实在論研究会」の例会においても進められた。「批判的实在論研究会」は、本プロジェクト研究の担当教員と受講院生を中核としつつもさらに拡大した規模の産社教員・院生で組織されている。同研究会は、他学部の研究者や学外の研究者にも開かれた形で開催し、他学部や本学以外からも常時数名が参加する研究会になっている。本年度は、月1回、基本的に各月の最終水曜日の4・5限連続の時間帯を用いて開催することになっている。同研究会については、本年度前期はほぼ方針通り毎月開催した。しかし後期は、11月の国際学術企画の推進課題が重要になり、また上記『社会を説明する』の翻訳作業が重なったために当初予定のように定期開催ができ

なかった。

研究会では、基本的に、昨年度に引き続いて、批判的实在論の創設者ロイ・バスカーの『自然主義の可能性』（式部信訳、晃洋書房）を中心にその内容理解と批判的検討を継続して行った。同書は、表題から連想される内容とは異なって、バスカーの社会科学基礎論を展開した批判的实在論の基本文献である。同書の検討会は、毎回議論が白熱し、当初の予定よりもペースを落とし、内容理解の十全を期す方向に方針を転換した。しかし、ここでの基本文献の検討は、批判的实在論の基礎的理解にとってきわめて重要であり、毎回の検討による白熱した討論は、その理解を深めることに大いに貢献した。同書については、この年度でほぼその講読は完了したといえる。

後期の11月までは、上記国際学術企画の講師報告原稿の検討や企画準備のための会合も必要となり、研究会の活動は同学術企画の実施準備の作業を中心に行うことになった。後述のように同企画は11月6日（木）、7日（金）の2日間にわたって開催され、成功させることができた。この間、正規の研究会の定期開催はできなかったが、こうした過程を通じて、研究会メンバーの批判的实在論への理解の深まりと自らの研究の進展がみられた。また、本年度の研究会では、木田融男担当教員による「批判的实在論とマルクス主義」に関する研究報告、野村優受講院生による「批判的实在論の実証主義批判の意味について」の研究報告がなされ、3月の研究会合宿ではさらにそれらの研究の発展が試みられており、次第に実質的な研究成果の報告がなされるようになってきている。こうした実質的研究の進展が見られるようになってきたことは、今年度の新しい成果であるといえる。

④ 産業社会学部創設50周年記念学術企画「批判的实在論と社会科学におけるその可能性」の開催

2014年度のプロジェクト研究の活動の大きな成果としては、産業社会学部創設50周年記念学術企画の一環として、人文科学研究所の支援も得て開催した国際交流研究会があげられる。具体的には、同上書の著者であるスウェーデンの研究者B. Danermark教授とJan Ch. Karlsson教授の2名を招き、「批判的实在論と社会科学におけるその可能性—社会科学の基礎理論におけるオルタナティブ—」と題して講演と討論を行う国際交流研究会の開催である。年度当初は予算の見通しが不明で明示的な目標に掲げることが難しかったが、その可能性を追求することは本プロジェクトの目標であった。幸い、学部創設50周年記念の学術企画として位置づけていただくことができ、また人文科学研究所の研究支援もいただくなかで、本企画を実現させることができた。

国際交流研究会「批判的实在論と社会科学におけるその可能性」は、Explaining Societyの著者の2名（Berth Danermark, Jan Ch. Karlsson）をお招きし、それぞれ2回の講演をお願いし、批判的实在論についての講演と討論を11月6日、7日の2日間にわたって行ったものである（会場、立命館大学衣笠キャンパス、末川会館3階第3会議室）。同企画は、多数の院生や同僚研究者を集めまた他大学からも参加者があり、成功を納めることができた。11月6、7の両日に開催された同講演会を開催するに当たっては、講師との連絡、講演原稿の翻訳と資料準備などの仕事を、プロジェクトメンバーや研究会メンバー、そして学部事務室や人文研事務局の協力のもとに無事に遂行することができた。これを契機に、本プロジェクトおよび批判的实在論研究会と国際的な批判的实在論研究グループとの国際的な交流の糸口を作ることができたことは大きな成果といえる。この講演内容は、2015年度の『産業社会論集』の特集にその翻訳が掲載されている。

⑤ 本プロジェクト参加メンバーの研究の前進

なお、この間、受講院生、担当教員ともそれぞれに批判的实在論についての理解を深め自らの研究への応用についての模索を開始している。それらの成果報告は、先進プロジェ

クト研究の各年度のまとめに詳しく掲載されているので、省略する。

※上記した国際交流企画の企画内容を示す資料として、同企画広報用の文書を以下に
載録しておく。

産業社会学部創設 50 周年記念学術企画

産業社会学部・人文科学研究所「批判的实在論研究プロジェクト」 共催

「批判的实在論と社会科学におけるその可能性

—社会科学の基礎理論におけるオルタナティブ—

講師；バース・ダナーマーク (Berth Danermark) 氏

(社会学；スウェーデン、オレブロ大学、健康・医療科学部教授)

ジャン・C h. カールソン (Jan Ch. Karlsson) 氏

(社会学；スウェーデン、カールシュタット大学、労働生活科学部教授)

招聘 二日連続講演 (二日とも通訳あり)

11月6日(木) 15:00~18:00 末川会館第3会議室

B. ダナーマーク 「批判的实在論への導入」

J. C h. カールソン 「社会構造と人間エージェント」

司会：佐藤春吉(立命館大学産業社会学部教授)

11月7日(金) 15:00~18:00 末川会館第3会議室

J. C h. カールソン

「批判的实在論；その研究手法と研究デザイン」

B. ダナーマーク

「批判的实在論応用のためのガイドライン」

司会：松田亮三(立命館大学産業社会学部教授)

※会場；立命館大学衣笠キャンパス 末川会館へのアクセスは、以下参照

http://www.ritsumei.jp/accessmap/index_j.html

イギリスの哲学者R. バスカーが提唱した批判的实在論は、批判的な社会科学の基礎理論について新たなオルタナティブを提案しています。批判的实在論の研究グループのメンバーであるスウェーデンの社会学者、ダナーマーク氏とカールソン氏は、批判的实在論の基本とそれに基づく研究方法論についての優れた入門書『社会を説明する』(ナカニシヤ出版より、訳書、近刊予定)を著しています。

批判的实在論は、まだ日本では十分知られていませんが、イギリスを中心にヨーロッパ諸国や英語圏で普及しつつあり、学際的な研究に刺激と指針を与えています。このたび、産業社会学部の創設50周年記念企画として、ダナーマーク、カールソン両氏をお呼びして、同書訳書刊行をまえに、批判的实在論について講演をいただき、討論の機会を設けます。批判的实在論は、社会諸科学を統合する学際研究の基礎を与える有力な理論的対案と方法論についての考え方を提案しています。ふるってご参加ください。

本企画の位置づけとその意義

批判的实在論とは

批判的实在論は、イギリスの哲学者ロイ・バスカー（Roy Bhaskar）が提唱し、独特の社会存在論にもとづく社会科学論、方法論を展開し、多分野にわたる学際的な研究リードしている社会科学の基礎理論である。日本では、まだほとんど知られていないが、多彩な分野の有力な研究者が集まって国際的な共同研究を展開している。その中心は、批判的实在論のための国際学会(International Association for Critical Realism: IACR)である。

批判的实在論の特徴は、科学の成立根拠を客観的实在について「超越論的推論」によって論証し、世界の实在性を、オープン・システムの相でとらえ、創発性と階層性という観点から多元的な複合的因果連関を考察する方法論を展開している。この考えは、必然性と偶然性の絡まりあう複雑な実在的因果連関を捉えるだけでなく、認識対象の实在性と同時に認識主観の实在性を承認することによって、主観の因果的力を承認するとともに、概念の実践的構成論を積極的に主張する。これによって、「存在論的实在論」と「認識論的相対主義」を同時に主張し、知識の社会的歴史的相対性と実践的目的に適合する客観的知識の双方の妥当性を明晰な論理で捉えている。科学的推論についても、演繹、帰納以外にアブダクション、リトロダクションという独自の推論の重要性を主張する。また、このような考えをもとに、社会的实在の独自性格を論じ、特有の社会存在論を展開する。批判的实在論は、ヒューム主義的経験主義を徹底的に批判し、科学を、予測可能性を基準にして評価する考え方に代えて、説明力こそ評価の基準であると主張し、「説明科学」を提唱している。

批判的实在論は、ヨーロッパ諸国特に英語圏を中心に、国際的なレベルで批判的な社会科学をリードし、さまざまな社会諸科学の共同に指針を与え、応用的で実践的な諸科学にも刺激と方向を示すことができる今日まさに求められている理論であるとも言える。こうした、社会と人間に関する諸科学を総合する批判的实在論の性格を反映して、この研究グループには、哲学、社会学、経済学、法学、政治学、倫理学、心理学、教育学、福祉、ジェンダー、社会言語学（特に批判的言説分析CDA）、メディア、医療、環境、国際関係論など、多彩な分野の研究者が集まっている。

それは、方向喪失感たゞよう現代の社会科学の学問状況においてきわめて貴重なものである。

産業社会学部の理念と批判的实在論との親和性

上記のように、批判的社会科学の基礎理論として新たなオルタナティブを与え、共同的学際的な研究に指針を与えている批判的实在論は、社会諸科学の現代化・総合化・共同化を学部理念とするわが産業社会学部にとっても、その理念を深める上で、大いに参考になる。その意味で、批判的实在論から学び、またこのような潮流をリードしている研究者たちと交流することはきわめて意義深いものがあると言える。本学部創設記念の学術企画として、批判的实在論グループの主要な研究者を招き、この学問潮流について理解を深め、学部の今後の学術研究の共同の基礎について考えを深め、新しい時代に向かって発展させるための足がかりが得られたらと期待している。

『社会を説明する—批判的实在論による社会科学論』（ナカニシヤ出版より訳書刊行予定）の著者を招聘した講演と討論のための研究会

今回の国際学術企画は、産業社会学部の教員・院生を中心に構成されている「批判的实在論研究会」が中心となって、現在進めている、スウェーデンの社会学研究者たちによって書かれた、批判的实在論による社会科学論の入門書、*Explaining Society*の翻訳事業に連動して企画されたものである。今回は、同書の著者たちのなかの2名（著者

グループ代表：Berth Danermark, Orebro 大学教授、Jan Ch. Kalsson, Karstad 大学教授) を招き、同書の内容に関わらせて批判的实在論の基本的な考え方、その魅力、学際研究の可能性について、講演していただき、また、批判的实在論についての認識を共有し、共同討議の機会を設ける。同書は、社会科学論および社会科学研究法入門書であり、耳慣れない用語や思考法が含まれているとはいえ、その内容は決して難解ではなく、批判的实在論の存在論と認識論をふまえた具体的な社会科学研究における方法論（「方法論的多元主義」）が非常に分かりやすく質を落とすことなく解説されており、社会科学における批判的实在論の優位性について説得力をもって書かれた優れた入門書となっている。本書は、ポスト・モダンの流行以降観念論的主観主義や相対主義に陥ってしまった社会科学に、客観的な知識を擁護しつつも独断論を免れた新しい合理的で批判的な社会科学の道を示してくれる。本書の刊行は、理論的な基礎を見失いつつある日本の社会科学研究に新たな視点をもたらし、大きな刺激を与えるものになると確信している。その意味で、本企画は、社会諸科学を統合する学際研究に指針を与えるものとして、我が産業社会学部の創設時の理念、現代化、総合化、共同化の理念の新たな活性化にとっても参照すべき重要な観点を提供してくれるだろう。

研究者・院生・学生の幅広い参加を呼びかけます。

本企画は、批判的实在論の提唱する社会科学の基礎理論のオルタナティブに関心をもつ研究者にとって有意義な企画である。しかし、講演は、特別に難解なものではなく、学部学生、院生にも、自らの学びや研究に反省的な視点を刺激し理論的指針を与える内容をもっている。学生・院生にも広く参加を呼びかけたい。また、本学内にも批判的实在論に関心を持つ研究者が徐々に増えつつあり、全国的にも各地に関心を持つ研究者が散在している。この企画を期に、そうした研究者にも呼びかけたい。

以上

参考；招聘講師について

バース・ダナーマーク (Berth Danermark) 氏は、スウェーデンのオレブロ大学、健康医療科学部の社会学教授。障害研究・障害福祉研究の分野ではスウェーデンの第一人者の一人。スウェーデン障害研究所のリーダーである。社会学論や社会科学論にも造詣が深く、スカンジナビア諸国への批判的实在論普及の第一人者。著書・論文多数。

ジャン・C h. カールソン (Jan Ch. Karlsson) 氏は、スウェーデンのカールスツタット大学労働生活科学部の社会学教授。労働、労働組織、日常生活における階級とジェンダーなどについて研究。社会学理論や社会科学論にも関心を持ち、批判的实在論を応用した研究を精力的に進めている。著書・論文多数。

.....以上、同企画に向けた案内文を再録.....

2015年度の研究活動とその成果のまとめ

2015年度は、過去2年間の活動の成果をもとにその第1段階の集約を行う節目の年であった。2015年度の計画と課題については、先述した通り、①参加者各個人の研究の推進とその成果の公表、②前年度2014年11月に開催した国際交流研究会での講師講演内容および同企画の報告の公表、③批判的实在論の基本文献の読解と検討の継続的推進、④訳書『社会を説明する』の公刊と国際交流企画の実現によって生じた全国的な研究者の交流へのニーズの実現、ゆるい交流と共同の促進、だった。今年度(2015年度)の本プロジェクト研究の活動は基本的にこれらの課題をやり遂げてきたといえるだろう。以下、その

内容について記すこととする。

1) 個人研究の促進とその成果の公表

本プロジェクト研究では、上記の目標を具体化するべく、今年度中に『産業社会論集』に「批判的实在論」特集を組む計画をたてることとした。この2年間のプロジェクト研究および「批判的实在論研究会」の活動を通じて各人の研究が一定の前進をみていることを踏まえ、また今年度が3年間のプロジェクトの集約の年でもあることから、担当教員、受講院生を中心に、批判的实在論研究会のメンバーにもひろく投稿を呼びかけることとした。また、個人研究の促進については批判的实在論研究会の取り組みの中でも重視してテーマ化してきたところである。研究の進展状況と原稿執筆の現実的可能性を見て、特集掲載号の刊行時期は、2016年3月の『産業社会論集』第4号とした。締め切りは12月末とした。結果として、予想を超える総計8本の論稿が集まった。うち1本は、執筆者が研修生ということで投稿資格がないと判明し、結果的に7本の論稿（論文5本、研究報告2本）で特集が組まれることとなった。それぞれの論稿は、多彩でありながら重要な論点でクロスする部分も多く、批判的实在論の議論の特徴や応用可能性の広さがよく分かる論稿が集まった。なお、投稿資格で断念した論稿も執筆者のその後博士課程進学確定によって、次年度以降投稿可能となっている。こうして私たちの活動から、実質的には8本の論稿が生まれたことは、本プロジェクトの活動の大きな成果といえよう。なお、私たちのCR研究もまだ始めたばかりであり、その研究の水準も質もさらに向上させる余地がある。今後の研究活動の質的強化によってさらなる発展を目指していきたい。

なお、同特集の編集はすでに終了し、校正もすでに完了し年度末3月には刊行されている。

同特集は、後述の国際交流企画の報告の第2部を含めて全体では以下のようになる予定である。以下、その目次のみを示すことにする。

.....『産業社会論集』「批判的实在論研究」特集目次.....

特集 批判的实在論研究

「産業社会論集『批判的实在論特集』編纂にあたって」 佐藤 春吉

第1部 批判的实在論研究論考

「メカニズムの発見およびその同定基準について—バスキアの科学哲学を足がかりとして—」 中澤 平

「批判的实在論とリトロダクション—社会科学方法論の比較から—」 木田 融

「批判的实在論に基づいた2つの研究デザインによるトライアングレーションの試み—インテンシヴおよびエクステンシヴ概念の再検討を通じて—」 野村 優

「ボブ・ジェソップの政治分析—戦略・関係アプローチに基づく資本主義国家分析、その到達点と課題—」 加藤 雅俊

「文化研究と批判的实在論—文化論的転回後の文化研究のために—」 大月 功

「社会問題研究における社会構築主義と批判的实在論」 中村 正

「批判的实在論を用いた社会疫学研究—Eastwoodらの研究を中心に—」 松田 亮三

第2部 産業社会学部創設50周年記念国際交流企画

「批判的实在論と社会科学におけるその可能性—社会科学の基礎理論におけるオルタナティブ—」 報告

第1報告「批判的实在論への導入」 バース・ダナーマーク, 堀 正晴 訳

第2報告「社会構造と人間エージェンシー」 ジャン・Ch. カールソン, 加藤 雅俊 訳

第3報告「批判的实在論；その研究手法と研究デザイン」 ジャン・Ch. カールソン, 中澤 平 訳

第4報告「批判的实在論の応用研究のためのガイドライン」バース・ダナーマーク、
佐藤 春吉 訳

.....

2) 国際交流企画報告、講師講演原稿の『産社論集』特集への掲載

214年11月6,7日両日にわたって開催された上記国際交流企画の内容の報告を社会的に活字メディアで公開することは今年度の重要課題であった。この課題についても、上記の『産社論集』における「批判的实在論研究」特集の第2部に組み入れることで実現できることとなった。紙数の制約と作業の問題から質疑応答などの詳細は割愛せざるをえなかったが、招聘講師2人の講演内容（講演は各講師2回ずつ計4回行われた）は紹介することができた。第1部の論稿と2人の講師の講演内容には互いに関連し合うところが多く、批判的实在論でなにが論じられているか、どのような問題が重視されているかは、本特集によってその重要な特徴の一端が浮き彫りにされているといえよう。

3) 「先進プロジェクト研究」授業の取り組み

本年度のプロジェクト研究の正規授業での取り組みは、上記の取り組みと同時に相対的に独立して、基本文献の読解と検討によって批判的实在論についての理解を深める活動に重点をおいて進めた。本年度の前期は翻訳出版した『社会を説明する』について、あらためて全体の主張内容の把握に努め、かつ各章ごとの論点の正確な理解を進めるための確認作業を行った。これによって、英文で読んでいて得ていたどちらかといえば部分的な理解を補正し、批判的实在論やその社会科学研究への応用についての考えの理解を深め、また全体像のもとで理解することが進んだと思われる。

プロジェクト研究の後期は、Dave Elder-Vass, *The Reality of Social Construction*, Cambridge University Press, 2012 をテキストとして、論読形式でその内容理解と批判的検討を進めてきている。同書は、「社会構築主義」に対する批判的实在論の批判的対話を試みたものであり、極端な主観主義的構築主義を批判すると共に实在論と整合する温和な形態の構築主義を擁護し、批判的实在論による独自の「社会構築論」を展開している。構築主義は社会学の方法にも大きな影響力を持ち、問題によっては重要な成果をもたらしているが、他方では極端な形態の構築主義は社会の实在的なあり方を否定しすべてが主観によって構築されるとする妄言を導いている。エルダー・バスは、こうした混乱を腑分けし、社会構築主義が持っているより社会についての合理的な存在論的理解につながる側面を積極的に評価し、新たな形で展開しようとしている。その基礎概念としてnorm circle（「規範的集合圏」？訳語未確定）を提唱している。その主張についてはなお吟味が必要であるとしても、实在論的社会構築主義の展開という基本方向は非常に説得力があり、生産的な意味をもっていると考えられる。この問題領域は、社会科学研究のためのメタ理論をより精緻なものとしていくために避けて通れない問題領域であり、プロジェクト研究としては、今後も読解と検討を継続していく計画である。

4) 批判的实在論研究会の活動

今年度の批判的实在論研究会は、先進プロジェクト研究の開講に合わせ、毎月の最終金曜日の4.5限を当てることとした。今年度は、研究会は文献講読ではなく、個人の研究報告にシフトしてきたことが特徴的な点である。開催日と報告者、報告テーマは以下の通りである。

- 第1回 5月29日(金) 報告者：杉本通百則(本学産業社会学部准教授)
テーマ：「批判的实在論と弁証法―『社会を説明する』を読んで―」
- 第2回 6月26日(金) 報告者：進藤兵(都留文科大学教授)
テーマ：「政治学研究と批判的实在論―自らの研究実践に関わらせて―」
- 第3回 7月31日(金) 報告者：石倉康次(本学産業社会学部教授)
テーマ 「私の研究関心と批判的实在論の接点について―『社会を説明する』をヒントにして」
- 第4回 10月30日(金) 報告者：野村優(本学社会学研究科博士課程)
テーマ：「批判的实在論におけるインテンシヴ概念とエクステンシヴ概念についての再検討」
- 第5回 11月27日(金) 報告者：中村正(本学産業社会学部教授)
テーマ： 「社会病理・社会問題研究における構築主義の今後―批判的实在論からの示唆―」
- 第6回 2016年1月26日(金)
報告者：大月功雄(本学社会学研究科博士課程)
テーマ：「文化研究と批判的实在論」
報告者：足立弦也(本学社会学研究科研修生)
テーマ：「批判的ディスコース分析における批判的实在論の理論的役割について―ノーマン・フェアクラフの理論枠組みから―」

5) 批判的实在論研究のネットワーク形成について

上記の課題は、昨年度の訳書『社会を説明する』の公刊と国際交流研究会の開催以後少しずつ広がり始めている批判的实在論に関心をもつ学内外の研究者達の緩やかな連携と共同を進め、その可能性を拡大していくという長期的課題にかかわる。我々の力量の問題もあり、すぐに重点的に取り組むとはいえないが、今後対外的な発信やネットワークの構築に組織的に取り組んでいく課題がある。すでに、我が「批判的实在論研究会」には、学外の研究者が数名ながら参加している。案内があれば参加したいという声も複数の方から寄せられている。本年2月4、5日には佐藤春吉が鳴門教育大学の大学院授業「現代教育人間論」の特別講師に招かれ、批判的实在論について講義を行った。講義の後には、CRについての研究セミナーが開催され、同大学の教員・院生と批判的实在論の応用可能性について意見交換を行ってきた。同大学や金沢大学など、本学以外でも研究会をつくる動きも生まれてきている。組織を強化しつつ、本プロジェクト研究がそうした研究活動のネットワークの中心となることが課題となるだろう。

Ⅲ. 2015年度研究内容

本プロジェクト研究参加者の研究内容と成果（報告レジメ等資料を含む）

※本報告書のⅡ. では、2015年度を含む各年度の活動経過と成果についてその概略を記した。2013年度と2014年度の研究内容の詳細については、当該年度の本先進プロジェクト研究の報告書に記載してあるので、そちらを参照していただきたい。

※ここⅢ. では、2015年度の本プロジェクト参加者個々の研究内容と成果についての報告書を掲載することとする。

・・・・・・・・・・担当教員と受講生の個人研究報告・・・・・・・・・・

1. 佐藤春吉（担当教員 産業社会学部特命教授）

本年度も本プロジェクトを引き続き担当してきた。批判的实在論について以前から研究してきた経緯があり、今年度も引き続き本プログラムの運営を中心的に担ってきた。

今年度の具体的な研究成果は以下の通りである。

(ア) 論文・単著：「批判的实在論による社会科学論の基本特徴—バース・ダナーマーク他著『社会を説明する』に準拠して—」（関西唯物論研究会編『唯物論と現代』No. 54、文理閣、2015年11月 所収）（pp. 92-110）。

同論文は、昨年度末に私が監訳者となって、本プロジェクトの成果として刊行した『社会を説明する』の基本的な緒論点を筆者なりに整理して提示し、その意義について論じたものである。紹介論文の性核が強いものであるが、平易とはいえ意外と錯綜し全体的な理論構造が把握しにくい同書の主張点を一貫した論理構造の中で理解できるように整理しており、同書理解に役立つ点で独自の価値が認められるものと考えている。

なお同論文は、2015年7月18日（土曜日）に、阪南大学サテライト・キャンパス「あべのハルカス」23Fにて開催された関西唯物論研究会にて報告したものをもとにしている。

2) 『産業社会論集』2016年3月号の「批判的实在論」特集の企画・編集に木田融男氏とともに参与した。また、特集全体の序文「産業社会論集『批判的实在論特集』編纂にあたって」を執筆した。特集第2部の国際交流企画の編集、および監修に関与し、バース・ダナーマークによる第4報告「批判的实在論の応用研究のためのガイドライン」の翻訳を行った。

翻訳（単独）；バース・ダナーマーク

「第4報告「批判的实在論の応用研究のためのガイドライン」

3) 2016年2月4日（木）5日（金）、鳴門教育大学大学院より招聘を受け、「現代教育人間論」にて批判的实在論についての特別講義を行った。また、同大学の教員と院生による研究セミナーに参加。同大学教授近森憲助氏（国際協力教育）、谷村千絵准教授（教育哲学・防災教育）らが独自ルートで批判的实在論に関心を寄せ、同僚研究者で研究会を組織し、批判的实在論の研究を進めその応用展開をはかっており、この機会に有益な意見交換と交流ができた。

4) 昨年度に引き続き、独自の「多元主義的存在論」の構想をもって研究を進めてきたが、残念ながら本年度はこのテーマでは論文執筆はできなかった。私にとっては、「多元主義的存在論」を展開することが本来の研究テーマであり、批判的实在論研究はこの構想を遂行するための一環である。このテーマと関連しては、1昨年来、John Searle の『*The construction of Social Reality*』など、彼の独自の社会存在論について関心をもって研究を進めている。Searle の議論は、批判的实在論グループの Dave Elder-Vass の实在論的社会構築主義による社会存在論の展開に重要なヒントを与えている。また、ドゥルーズ派の Manuel Delanda も『*A New Philosophy of Society*』で異なった視点から

ではあるが類似の哲学的な实在論的社会存在論を展開している。「实在論的社会存在論」の構想は、近年の社会哲学の動向において注目すべき志向となっている。批判的实在論を含むこうした現代哲学の動向のなかで多元主義的存在論の構想を位置づけていきたいと考えている。これらの研究成果はまだ公表できていないが、次年度の課題としたい。

5) この数年、ヴェーバーの科学論における实在論と親和性をもちうるその世界観的な基礎を、多元主義的存在論の視点から読み解き探り出す研究を行っている。これまで、「M. ヴェーバーの科学論の構図と理念型論」を統一の副題として、産業社会論集に連載論文の形で順次その成果を公表してきた。そのなかで、バスキアの批判的实在論の観点も参照している。しかし、今年度も本テーマでの続編論文を完成するにいたっておらず、連載が中断した形になっている。次年度こそは連載を継続したい。

ちなみに、昨年度までの連載は、「M. ヴェーバーの科学論の構図と理念型論」（その1）として「M. ヴェーバーの文化科学と価値観型論」（上）、（下）（『立命館産業社会論集』vol. 48, no. 3, 同 vol. 48, no. 4）、「M. ヴェーバーの科学論の構図と理念型論」（その2）として、「M. ヴェーバーの現実科学と因果性論」（上）、（中）（『立命館産業社会論集』vol. 49, no. 2, 同 vol. 49, no. 4）である。

＜なお、本プロジェクト研究の推進に関しては過年度において以下の仕事を行った＞

※本プロジェクト立ち上げの際には、佐藤春吉が過去に行った仕事、M. アーチャー『实在論的社会理論：形態生成論アプローチ』（佐藤春吉訳、青木書店、2007年）、「存在論からの社会科学の刷新」『唯物論と現代 第40号 20世紀の唯物論』（文理閣、2008年）。「批判的实在論（Critical Realism）と存在論的社会科学の可能性」『唯物論研究年誌』（第17号、2012年）が、批判的实在論理解ならびに議論の素材として参考にしてきている。

※昨年度の研究プロジェクトの最大の課題であった『社会を説明する（Explaining Society）』の翻訳について、監訳者として作業の進行の責任を担った。訳者として第1章を担当し、監訳作業、原著者との連絡、日本語版への序文依頼と翻訳、監訳者後書き、訳注の作成などを行った。同書の翻訳刊行は、我が国の社会科学研究に重要な意味のある問題提起となると思われる。

※昨年度の国際研究会企画、「批判的实在論と社会科学におけるその可能性」の開催に際してその交渉、企画準備、各種の実務的調整などの作業を行った。同企画では『社会を説明する』の著者の2名（Berth Danermark氏とJan Ch. Karlsson氏）を招いて、講演と討論を行った。

※昨年度開催された、セミナー「批判的实在論と対人支援」では、「批判的实在論とはなにか？」と題する報告を行った。そのレジメは、2013年度の本プロジェクト研究の報告書に掲載されている。

※翻訳（単独）マーガレット・S. アーチャー「主観性存在論的位置：構造とエイジェンシーをつなぐ失われた環（The ontological status of subjectivity: the missing link between structure and agency）」『人文科学研究所紀要』104号（2014年3月）。

以上

.....

2. 木田融男（担当教員）

先進プロジェクト研究報告レポート

木田融男

「批判的实在論とリトロダクション —覚え書き—」

はじめに

『産業社会学会論集：批判的实在論特集』に、「批判的实在論とリトロダクション—社会科学の方法をめぐる—」というタイトルの論文を書かせていただいたが（木田 2016）、その内容は「社会学研究科大学院、先進的プロジェクト研究」に基づくものであり、批判的实在論に係る私の研究の一環における論文であるが、本稿で考察している諸論点にあってなお検討を要するものを、本最終報告レポートに「覚え書き」として書き留めておきたい。中心となるテーマは、批判的实在論（Critical Realism、以下CR論）が故バスターやアーチャーらにより展開されてきた方法について、その中でも一つの柱と思えるリトロダクション（retroduction、以下RD）をめぐる、マルクス理論との討議を通して索出されてきた社会科学における方法論上の論点を考察している。

イギリスにおけるマルクス理論家たちの中で、基本としてCR論を認容しつつ研究対象とする動向や論議については今までの拙稿を参照して頂きたいが（木田 2015A、2015B）、RDをめぐるのは、マルクス理論家の中でCR論について認める立場をとりつつも、厳しいスタンスを取っていると思われるロバーツの論点を出発点に置いている（Roberts §1-§2 in Brown et. al. (eds.) 2002）。彼のCR論に対するスタンスは「マルクス理論はCR論に扶助されるものはない」というものであり、CR論の諸点（「深さのドメイン」「因果性」「構造の力」などの論点、「偶然性レベル」の存在への考察等）に対してマルクス理論としても要検討の必要性は認容するものの、バスターのCR論やRDを「線型的運動」の方法とし、マルクスにおける『資本論』の方法（method in Marx's Capital、以下MMC）である「循環的運動」の方法から批判を行い、したがって「RDはMMCではない」と断じている（ibid. p.14f.）。

1)

このイギリスにおける討議状況に対して、拙稿（木田 2015A、2016）では私自身の見解を提示しその論証を行ってきたが、本レポートではその各論証を含めた必要な諸論点についての「覚え書き」を提示しておきたい。

1. リトロダクションと『資本論』の方法

(1) ロバーツの見解に対する私の見解

A 私の見解

（以下ロバーツについてはRoberts §1-§2 in Brown et. al. (eds.)2002、私の見解は木田 2015A、2016）

- a CR論のRDが社会科学における必要性／有効性を、私は認容する。
- b 社会科学における「循環的運動」の方法を重要とするロバーツの視点から、「線型的運動」の方法に対する彼の批判に、私は同意する。
- c MMCは「循環的運動」の方法であるというロバーツの見解に同意するが、RDは「線型的運動」の方法であるとする彼の見解には、私は同意できない。

- d 「RDはMMCではない」としてRDさらにはCR論に対するロバーツの批判には、私は同意できない。
- e RDも「循環的運動」であるとし、RDとMMCは方法論上「重なる所が多い」（すなわちRD \equiv MMC）、という見解を私は取りその論証を行っている。

B 上記見解の論証

（以下、Bhaskar 1975, 1979（式部訳 2009, 2006）、Sayer 1994, Danermark. et.al. 1979（佐藤監訳 2015））

- a RDについてはバスカーの科学の三局面およびセイヤーの「具体 \leftrightarrow 抽象」の見方を基礎としている。
- b RDとMMCとの比較を容易にするために、RDをRD IとRD IIとに分岐した。
- c まずは、RD I \equiv MMCであるとした。
RD Iは科学の三局面そのものにあたり、具体 \leftrightarrow 抽象とし、実在的ドメインである「構造／関係」の同定＝「構造分析」にあたり、MMCの抽象-具体では、単純な「分析-総合」にあたるとした。
- d 次には、RD II \equiv MMCであるとした。
RD IIは科学の三局面から、さらには「より深いレベルや層」における実在的ドメインである「（生成／因果）メカニズム」の同定＝「因果分析」を目途としているとして、MMCでは「弁証法的歴史形成」の見方にあたり重なるが、MMCの方法そのものにはメカニズム析出を目途とした方法は見当たらず、メカニズム析出のためには「条件設定」を必要とする。

(2) 二つのリトロダクション：RD IとRD II

RD IとRD IIについては、拙稿（木田 2016）よりさらに詳述しておきたい。（Bhaskar 1979（式部訳 2006）、Sayer 1994）

A RD Iについて

- まずはバスカーおよびセイヤーのRDの見方における、「科学の三局面」の方法が「抽象 \leftarrow 具体」の方法であるという共通点の箇所をRD Iの論拠とし、そしてその共通の方法はまた「MMC」とも同じであるとする。
- a バスカーの科学の三局面（一局面：現象の同定、二局面：説明の構築、三局面：説明の検証）のうち、セイヤーに対応して一局面から二局面を「具体 \rightarrow 抽象」とし、三局面を「抽象 \rightarrow 具体」とした。
- b そしてaの方法は、MMCにおける「下向（具体 \rightarrow 抽象）」と「上向（抽象 \rightarrow 具体）」の方法に対応するとした。
- c したがって、このバスカーおよびセイヤーの方法、そしてMMCとが「重なる」RDについてを、RD Iとした。
- d MMCが「下向＝抽象化」の過程で析出し得た概念（下向における最後の概念は「商品」）は、概念の性格から見れば実在的ドメインであり得るが、「上向＝具体化」の過程で、上位概念（商品については上位にある概念は貨幣、資本）の構成要素として「構造／関係」（実在的ドメイン）ではあり得ても、上位概念を生成していく「メカニズム」（実在的ドメイン）ではあり得ない。
- e 逆にいえば、MMCには、実在的ドメインとしての生成していく「メカニズム」を析出するのに対応する方法の明記はなく、生成していく「メカニズム」析出のためには「条件設定」

を必要とする。2)

B RD IIについて

实在的ドメインとしての(生成/因果)メカニズムを析出する方法を、RD IIとしたい。RDをIとIIとに分岐することは、次のバスカーの言によっている。

「さらに、a 科学がこの三局面を経て現象の深部で作用している生成メカニズムの同定へと至ると、b 今度は その同定された生成メカニズムが説明される現象となり繰り返していく。c このように繰り返される過程において、实在性のより深いレベルもしくは層が次第に解明されていくのに応じて、d 科学は認知的資源や物質的道具を自在に使って、その説明を構築し検証しなければならない。(Bhaskar 1979 p. 12f. (式部訳 2006 p. 13f.) 必要な箇所については拙訳)」

以下、この文意を解釈しておこう。

a 「・・・科学がこの三局面を経て現象の深部で作用している生成メカニズムの同定へと至る・・・」

a-1: まずは科学の三局面そのものにおける作業では、現象の「説明」については次のものである。

後述するように、科学の三局面の過程とは、セイヤーによって具体 \leftrightarrow 抽象の相互作用と捉え得るので、ここで析出できる「説明」は、主として实在的ドメインでも「構造/関係」と考えられる。→主として RD I

a-1-1: 現象の「説明」として、構成する要素すなわち構造/関係(实在的ドメイン)が主として同定される。

→主として RD I

次の過程は副次的に生じる。

a-1-2: 現象の単なる「説明」として、出来事のドメイン(経験的/現実的ドメイン)が同定される。

a-1-3: 現象の「説明」として、生成するメカニズム(实在的ドメイン)が稀であるが同定される。

「抽象化」の作業から a-1-3 の場合を同定できるのは多くはない。→稀であるが RD II

a-2: 次に科学の三局面を経て、その後における作業による現象の「説明」とは次のものである。

具体 \leftrightarrow 抽象の相互作用を経た後の、別個の作業により析出できる現象の「説明」として、生成するメカニズム(实在的ドメイン)が同定される→主として RD II

b 「・・・今度は その同定された生成メカニズムが説明される現象となり繰り返していく。」

a で同定された「説明」が次には「説明される現象」となり、「始めの説明」に対する「新たな説明」が析出される。ここでの「始めの説明」および「新たな説明」として、生成するメカニズム(实在的ドメイン)が主として同定される。→RD I および RD II

b の過程は、次の二通りが考えられよう。

b-1: 三局面が展開されたと同じ階層(stratification)で、ここでの「始めの説明」に対する「新たな説明」として同定される場合。

b-2: 三局面が展開されたのとは異なる(下方の)階層で、ここでの「始めの(階層におけ

る)説明」に対する「新たな(階層における)説明」として同定される場合。

c 「このように繰り返される過程において、実在性のより深いレベルもしくは層が次第に解明されていく・・・」

ここで解明される「より深いレベルもしくは層(strata)」とは次のものと考え得る。

→RD I および RD II

c-1: より深い「レベル」とは、同じ階層内で行われる場合であろう。

c-2: より深い「層」とは、異なる(下方の)階層で行われる場合であろう。

d 「・・・科学は認知的資源や物質的道具を自在に使って、その説明を構築し検証しなければならない。」

→RD I および RD II

d-1: 「認知的資源や物質的道具」が、「説明」の構築や検証(経験的テスト)に使用される。

d-2: 上記の科学技術の発達が、「より深い」実在的ドメインの解明を進める。

(3) 二つの RD の例

A MMC の場合

MMCは先述しているように、元来は下向=抽象化と上向=具体化の方法(具体↔抽象の相互作用)を基本とするのであるから、抽象化の方法のままではRD I(構造/関係の同定)しかないのではと考えられよう。したがってMMCにおいてRD II((生成/因果)メカニズムの同定)という研究目的なりその手法、そして同定結果(超事実的な実在的ドメインとしてのメカニズム)を如何に例示し得るかが、「RD=MMC」であるかの論証課題であろう。(以下、MMCの例示は、Arthur 1997、見田 1963、1968、に依っている)

下向=抽象化していく過程は次のようであろう

例 人口(=「混沌」とした社会関係)→(・・・→階級→)資本主義生産の総過程→資本の流過程→資本の生産過程(→相対的剰余価値の生産→絶対的剰余価値の生産→貨幣の資本への転化→商品と貨幣→商品)と、下向=抽象化(研究の方向)が示され、次にはその逆に上向=具体化(叙述の方向)が示される。

a 「資本」概念の場合

しかし資本主義生産の総過程(第三部)を、「資本」の流過程(第二部)と生産過程(第一部)とに下向(抽象化)したとしても、この二つの過程への分離(抽象化=分析)は、それらを単純に総合して資本主義生産の総過程を「説明」できるが、具体的な現実(総過程としての資本主義生産)を二つの可視的な(「事実的な」)過程へと「操作による抽象化」をしており、実在的ドメインの構造/関係を析出する過程と言えよう。そして二つの過程のうち「資本」の生産過程がより「本質」の過程(すなわち資本主義のより「実在的」な深部への探求過程)として分析されているのだ、と理論づけられるならばまさしくRD Iであろう。さらにその理論のもとに「(相対的、絶対的な)剰余価値」概念が下向(抽象化)の過程で前面に掲げられるならば、それは資本主義的な生産様式のみならず社会関係の「本質」に迫ろうとしており、後の「商品」からの上向=具体化による種々の規定と関係性を纏った概念として「説明」されて行くのならば、「超事実的な」実在的ドメインのしかも生成/因果メカニズム(歴史的生成)を含有する概念とは言えそうではある。ただしかしこれら「資本」等は、どういった特性を持った概念であるのか、したがってRD IIにあたるものなのかどうかはまだ不確定である。

次には下向＝抽象化の過程における最終部面において、重要な商品概念が出現してくる

b 「商品」概念の場合

『資本論』の出発点をめぐっては、拙稿（木田 2016）で紹介しているが、「商品」がなぜその叙述の出発点なのかは諸論あるところである。また「商品」概念をめぐっては、ロバーツもその論争を下敷きにして「RD は MMC ではない」とい結論を出したのであるが、彼の論拠として「商品」＝非歴史的（歴史貫通的）で一般的な抽象概念とする「歴史＝論理説」である一方向的な線型的運動の方法が RD だとしたからであった。対するロバーツの支持する MMC の方法とは循環的運動の方法をとるのであるが、「商品」＝資本制的な特定歴史における抽象概念として、資本制生産により生成されるものの、やがては（まだ規定していない資本により）生成されることを前提とする「商品」であり、しかしその「商品」概念はやがては「資本」を生成する概念でもある性格を有する。したがって RD と照らし合わせるならば、商品概念とは「事実的」であるが、同時に「事実的」でない（＝「非事実的」である）概念、すなわち「事実」である／ないということについては、「半事実的（半分事実／半分非事実）」である概念、あるいはまさに「事実」であり同時に「非事実」であるという意味で「事実／非事実」を超越した＝すなわち「超事実的」という特性を有した概念なのだと言えるのである。またそういう特性であるがゆえに、「商品」は『資本論』の出発点を構成したのである。

ただし RD ということでは、「商品」とは「資本（あるいはその本質である剰余価値）」を構成する重要な要素であり、ゆえに構造／関係（実在的ドメイン）を析出する RD I であるとは言えよう。そしてまた「資本」を生成するメカニズムでもありと語ることが可能であるように見えよう。けれども、循環的運動を、認識論（すなわち具体←→抽象の相互作用）のみで考えるのではなく、拙稿（木田 2016）で紹介したアーサーに依って、存在論（すなわち商品→・・・→資本→商品）でも生成するメカニズム（実在的ドメイン）と考え得る概念であるには、「単純な」分析-総合の手法のみでは生成するメカニズムは語れず、「弁証法的総合」（すなわち運動する対象その様態を反映する）概念であるためには、必要な「何らかの条件」設定がなされねばならないのであり、その条件設定が明示されるならば生成するメカニズム（そして「超事実的な」実在的ドメイン）としての「商品」概念が同定される RD II が MMC にも存在するということになるのであろう。

そして資本の生産過程における剰余価値を含んだ「循環過程」を一連の「（生成／因果）メカニズム」として、同じように「何らかの条件」設定がなされるならば、『資本論』第一部レヴェルではあるけれども、資本制社会／生産様式の「再生産」や「形態転換」につなぎ得る「（生成／因果）メカニズム」（歴史的生成）が同定され、MMC も RD II であるということになるのである。3)

B 自然的世界の場合

バスカーは化学反応の実験例から、まずは実験での観察、そして「説明」にあたるものとして「原子論や原子価、化学結合」に係る理論をあげ、その内容としてはセイヤーと同じく「構造とメカニズムの発見」としている。そして「構造」については「概念と化学物質」をあげ、「メカニズム」については「化学反応」をあげているが、続く表現では構造とメカニズムを「仮説的な未知の実体(entity)や生成メカニズム」、「科学構造と科学変化」などと記している。すると上記したような RD の二つの分岐における RD I が「化学物質、実体、科学構造」にあたり、RD II が「化学反応、メカニズム、科学変化」にあたりと言えよう。（Bhaskar 1975 p. 167f. （式部訳 2009 p. 213f.））

次に具体例で見えていこう

a 水(H₂O) の場合

水について、その（生成／因果）メカニズムをRDする場合、その出来事であるH₂Oをまずは、抽象化すればHとOとが水を構成する元素（原子）として析出される。まさしく、このHとOとは水を構成する重要な「構造」と言え、またH二つにO一つとが、相互に結ばれる（原子価）模型図が念頭に浮かび、その構造間の「関係」が析出される。したがってまずは水の「構造／関係」が実在的ドメインとし同定されるRD Iが見出される。（ただし、必ずしもRD Iで同定される実在的ドメインについては「超事実的な」ものではなく、過去において未知であったものあるいは仮定はされていたが認知されていなかったものが、現在ではその構造／関係は経験的に認知可能である）4) しかし、ではそのH二つにO一つの複数元素が、水として生成されていく「メカニズム」を同定するRD IIについてはどうだろうか？ HとOとの内在的な「化学反応（結合、変化）」か、あるいはその周りの力や熱等による外在的な条件が生成させる等、今日の化学においては既に「説明」は可能なのだろうが、私たちにとってHとOという構造／関係を同定したRD Iと、水を生成させるメカニズムの同定であるRD IIとの相違、および前者は「抽象化」の比較的容易な（操作する）作業で析出されたのに対して、後者はおそらくさまざまな化学理論や実験の結果、および既存の知的資源やモデル等の駆使による「抽象化」のみの容易ではない（思考による）同定作業を要している。そして高度に抽象化された「仮説理論」で「説明」はされるが、そのメカニズムの所産（水自体の生成）は認知し得ても、その「超事実的な」メカニズム（生成過程）の「事実的な」認知についてはそう容易ではないだろう。

b レーヴィによる実験結果の場合

ダンマーク等の編集による書（(Danermark, B. et. al. 1979, (佐藤監訳 2015)）等から、レーヴィによる実験結果をRDの例示として検討してみよう。まずは、心臓の筋肉を「（操作による）抽象化」をすれば神経（心臓の構成要素＝構造）が析出される。そして電気の刺激という条件を付与して、心臓（筋肉）が鼓動をするのは、当初は神経による作用だと想われていた。神経をさらに「分離＝抽象化」をして、ある「化学物質」（心臓や神経を構成する要素＝構造／関係）が析出された。そして一方ではこの化学物質を含む神経と、他方では神経を取り除いた化学物質との二つの場合に電気刺激という条件を付した実験結果では、どちらも心臓の鼓動を生成させたとされる。ここからレーヴィは、心臓の鼓動（出来事）の生成は、神経ではなく化学物質によるものだと同定したのだ。すなわち心臓の鼓動を生成させた構造／関係（実在的ドメイン）を、「操作による抽象化」で析出し得た。しかしこの実験は、化学物質が生成に携わる構成要素＝構造／関係をRD（＝RD I）できたことは示してはいるが、その化学物質による「化学反応」＝（生成／因果）メカニズムについては示し得てはいない。すなわちRD II（「（生成／因果）メカニズムの同定」は、思考の上では提示はされているし、「出来事（心臓の鼓動）」の生成について検証（経験的にテスト）はされているが、あくまで「超事実的な」実在的ドメインとしてのそれ自体の検証はされ得ないRD IIだと言えるのである。

かくして、RD IとRD IIとの違いについては、前者は「（操作によるか、思考によるかはともかく）抽象化」による「実在的ドメイン」である「超事実的あるいは事実的な構造／関係の析出（構造分析）」であり、後者は「抽象化」も含む既存の知的遺産や理論を基とした、「思考」が創り出すモデル等を駆使した「実在的ドメイン」である「超事実的な（生成／因果）メカニズムの析出（因果分析）」という相違なのである。もちろんのこと両者は切り離

せない。メカニズムを知るには、まずはそのメカニズムを構成する要素としての構造の析出が必要な条件であり、その構造間の関係（これは場合によれば「メカニズム」と相即の関係にある）の析出もやはり必要な条件だろう。これが RD I であるがその上で、構造／関係という構成要素が、いかに反応させ、いかに運動させ、いかに眼前の出来事（経験的／現実的ドメイン）を生成させる因果力となるのか、その「(生成／因果)メカニズム」を、抽象化プラス α である複雑な作業により析出させるかが（十分条件）RD II となり得るのである。

2. 係る論点

(1) 「超事実的」なもの

「科学の三局面」には三つ目の局面に検証（式部訳では経験的テスト）が出てくる。しかし実在的ドメインにおける構造／関係や（生成／因果）メカニズムには、その存在論的特性として「超事実的(trans factual)」なものという表現がなされる。その意味として考えられることは次のようであろう。出来事（経験的／実在的ドメイン）は「事実的」とされるから、a 「経験的」ではないという意味があるが、それだけではなく、b 「現実的」でもないという意味を含んでいる（現実的ドメインは「経験」されない出来事という意味であるが、「事実的」な存在ではあろう。すなわち人間の感覚（五感）によっては捉えられないから「経験的ドメイン」ではないが、しかし高度な実験装置、運転装置、遠距離／近距離の認知器具（電子望遠鏡／顕微鏡等）、あるいは出来事を捉えた数式、モデル、等々によって、さらにはそれらの発達展開によって、人間の感覚以外によって「事実」的存在として認知され得ると考えられよう）。そして、c 実在的ドメインでも例えば、上記のレーヴィの実験による構成要素（構造／関係）である「化学物質」については認知されているわけであるから（それゆえ、「操作による抽象化」によって隔離されたし、「化学物質」が鼓動の原因であることを示す比較実験を行うことも可能とした）、当然これは「事実的」な特性を持っている場合がある。しかしながら、d 実在的ドメインでも（生成／因果）ドメインについては「超事実的」なものとその特性が語られ、したがって経験的のみならず、現実的にも認知されない、すなわち出来事として認知され得ないし、また構造／関係は「事実的」として認知される場合があったとしても、その運動である（生成／因果）メカニズムについては「超事実的」なものとなされ、経験的にも現実的にも認知されないのである。そこでのメカニズムが「超事実的」というのは、運動そのもの、あるいはその運動を創生するものが、「事実」の有無から超越しているという含意を持つということだろうか。しかし問題は、「科学の三局面」での実在的ドメインの同定（RD I）、あるいは実在性の「より深部のレヴェルや層」での実在的ドメインの同定（RD II）における、「超事実的」なものの検証を如何に行い得るのかということであろう。次の項ではその問題を検討したい。（Bhaskar 1979（式部訳 2006）、Sayer 1994）

(2) MMCにおける「超事実的」なもの

さて、「RDはMMCと重なる」という問いに「イエス」と答えるには、MMCにおいてこの「超事実的」特性をどのように扱っているか、そしてそれはRDと重なるのかという点を論証しなくてはならない。

次に、MMCに見られる「超事実的」なものを列挙して紹介しておきたい。5)

<MMCにおける「超事実的」な事例（素材は、見田 1963, 1968 による）>

a 抽象化された概念：「未事實的」な概念

『資本論』の「下向（抽象化）」により（操作による場合と思考による場合、そして両者による場合がある）、「具体」の内より「本質的」なものが「抽象（隔離）」されていくわけではあるが、ある段階では、「事實的」な特性を消滅させ「超事實的」な特性となる場合がある。ただし、この概念は「上向（具体化）」の過程で、「超事實的」な概念から「事實的」な具体的概念になるので、「未だ事實的でない」概念あるいは「潜在的には事實的である」概念として「未事實的」な概念と名付けておこう。

例 諸資本からの抽象化：諸資本（商業、農業、金融資本等々）から、資本主義における本質としての生産資本を「抽象」しても、その概念対象はまだ具体性を持っており「事實的」であろうが、共通の側面を「抽象」すれば、「資本」という一般的な抽象概念となり、この抽象性は「超事實的」であり、しかもRDの實在的ドメインにおける構造／関係にあたる多くの概念がそうである（例 商品、価値等）。

b 非歴史的（歴史貫通的）な概念：「非事實的」あるいは「汎事實的」な概念

上記と重なるのではあるが、抽象化の過程で現れる概念として、歴史を通底している一般的な抽象概念としての商品がそうである。MMCの論争では、「線型的運動」（論理＝歴史的）論者が依拠した概念であるが、一方では「超歴史的」という意味で、「事実を超える」という意味でまさに「超事實的」な概念であるが、このまま「上向（具体化）」しても、歴史的な貨幣や資本へと展開していかない概念であるという意味では、この概念は「事実に非ず」という意味で「非事實的」な概念と言えようが、他方では、どの歴史にも（歴史貫通的に）至る所に散在する「小商品生産者」が生産する、「汎事實的」な概念としての商品という意味も持っている。

この「非事實的」／「汎事實的」な商品こそ、ロバーツがCR論およびRDを一般的な抽象概念から始まる「一方向的性格」すなわち「線型的運動」の方法だと批判したのと同じ概念であろう。

c 歴史的な前提を「前借りした」概念＝「半事實的」な概念

上記に対して「循環的運動」の方法では、資本制という特定の歴史性を前提するが（やがて「上向（具体化）」の過程で現れる資本の生産により生成し、次にはその資本を生成していくという意味での前提を「前借りして」いる）、しかし『資本論』の叙述を出発する瞬間は、まったく一般的な抽象として措定されている商品概念でもある。したがってこの商品の片一方では、具体的な歴史性を前提した「半分は事實的」な概念であり、しかしもう片一方では、歴史的に実際では資本からまだ生成されていない概念であるという意味で「半分は超事實的」な特性を持つ概念なのである。RDで言うと、この商品概念はRD Iにおいて（構造分析、あるいは単純な分析総合では）、次の貨幣や資本の構成要素としての「事實的」な實在的ドメインとしての構造／関係であり、他方ではRD IIにおいて（因果分析、あるいは弁証法的歴史的生成では）、資本制がもつ特定の「歴史的條件」の下で、貨幣や資本を生成する「超事實的」な實在的ドメインとしての（生成／因果）メカニズムとも成るのである。

d 他の「超事實的な」概念

他にも分析／単純な総合に係る概念として「上向（具体化）」する過程で構成要素を形成する一般的な抽象概念（「超事實的」）としての「価値」概念や、弁証法的歴史的生成に係る概念としての、現象に対する本質ではあるがそれゆえ「超事實的」な概念である、「剰余価値」、「階級」等の概念であろう。後者については、とりわけ「抽象的な」概念が、如何に弁証法的歴史的生成（RDでは（生成／因果）メカニズム）概念になるかの「何らかの條件」設

定が主たる課題となるが、それは拙稿（木田 2016）を参照していただきたい。

MMC にも、「超事実的」特性を持った概念があり、しかもそれが実在的ドメインの構造／関係あるいは（生成／因果）メカニズムとなったが、ただ MMC の場合はこれら「超事実的」概念はその検証においては、「抽象 \leftrightarrow 具体の相互作用」における検証と、結局は資本制社会／生産様式における諸問題にたいする「説明力」のように思える。次には RD における検証（「科学の三局面」における三つ目の局面の問題＝構築された「説明」の検証）について検討をしたい。

(2) 「説明」の検証

実在的ドメインとりわけ構造／関係よりは（生成／因果）メカニズムという「超事実的」特性を持つものの検証（経験的テスト）について以下考察を加えておく。（Bhaskar 1979（式部訳 2006）、Sayer 1994、Danermark et. al. 1979（佐藤訳 2015））

a 「説明（実在的ドメイン）」の所産の検証

まずは、科学の三局面が述べる三つ目の局面の「検証」とは、そこで構築された「説明（実在的ドメイン）」が如何に、それにより生成された現象＝出来事（経験的／現実的ドメイン）に対して妥当な「説明力」を持つかであろう。したがって「経験的テスト（式部訳）」と言っても、「経験主義的な実証」としての検証ではないことの確認が必要だろう。すなわち、検証する対象は、「超事実的」な実在的ドメインすなわち構造／関係およびメカニズムではなく、その「所産」すなわち生成された出来事であり、その対象としての所産すなわち出来事への「説明（実在的ドメイン）」が如何に妥当性を持つかどうかのである。したがって実在的ドメイン（構造／関係であれメカニズムであれ）が、「超事実的」なのであるから、経験や認知の不可能性については、検証においては何ら問題にならないはずなのである。しかし、バスカーが「経験的テスト(empirical test)」という用語を使用しているが故に、「経験主義的な検証は可能か不可能か」とか、「自然科学では実験があり検証は可能だが、社会科学では不可能だ」という論議になるのであるが、「説明」の検証とは、あくまでも実在的ドメイン（構造／関係、メカニズム）が生成した所産への「説明」の妥当性のことなのである。

b 「説明（実在的ドメイン）」そのものの検証

「超事実的」な実在的ドメインによる所産すなわち出来事（経験的／現実的ドメイン）における「説明」が妥当性を持ったとしても、そのことは必ずしも当の「説明（「超事実的」な実在的ドメイン）」の妥当性（正しさ）の証明とはならないということであり、逆に言えばそこでの妥当性（正しさ）の検証はどうするのが問題とはなろう。例えば、レーヴィの実験において心臓筋肉にたいしてその鼓動（＝出来事、経験的ドメイン）は認知でき、「化学物質」（＝構造／関係、RD I による実在的ドメイン、ただし「事実的」に経験可能）が鼓動を生成するメカニズムの構成要素であることまでは経験できたし、比較実験の結果により説明の妥当性も得ることはできた。しかし、「化学反応」（すなわち RD II による実在的ドメインであるメカニズムであり、「超事実的」であり経験や認知は不可能）そのものが、妥当なのか（正しいか）どうかは、「説明」の妥当性（所産の経験や認知による）とは別問題である。

そこで実在的ドメインである「説明」の検証については次のような表で整理をしておきたい。

<表：「説明」＝実在的ドメインの検証>

RD I：実在的ドメイン＝構造／関係の検証

a 構造／関係の所産の検証：経験や認知は可能

＝説明の妥当性が検証される

b 構造／関係そのものの検証：経験や認知が可能の場合と不可能の場合あり

＝認識道具など科学技術の発達等によって経験や認知が可能となり、そのものが検証される

RD II：実在的ドメイン＝（生成／因果）メカニズムの検証

a （生成／因果）メカニズムの所産の検証：経験や認知は可能

＝説明の妥当性が検証される

b （生成／因果）メカニズムそのものの検証：「超事實的」であり原理的に経験や認知が不可能

＝認識道具など科学技術の発達によっても原理的に経験や認知が不可能であり、そのものは検証できない

そこで、究極は「超事實的」な実在的ドメインの（生成／因果）メカニズムそのもの（例としてよくあげられるのは、重力や磁力であろう）の経験や認知は、如何に科学技術の発達があっても「原理的には」不可能なのであり、その検証はやはり如何に「説明」の妥当性（正しさ）を持つかにかかると言えよう。

おわりに

拙稿および本報告レポートでは、CR論およびRDの「階層論」からの検討は殆ど成されていない。それは自然的世界が主として扱われ、社会的（さらには人間的）世界についてはまだ余り問題にならないからである。しかし、例えば『資本論』で言えば、出発点の商品をさらに「下向（抽象化）」すればやがて抽象的労働（労働時間）やさらには人間の「欲望」が出現する。また途中の「上向（具体化）」の過程では、「労働過程」や「物象化、物神崇拜」等の問題が出てくるし、最終章では「階級（エージェント）」が出現する。これらは「下方あるいは上方」の階層という視点からすれば極めて複雑な構成であろうが、いずれにしてもMMCには「階層的視点」も要求されるということであろうが、今後の課題としたい。6)

注

1) ロバーツや他のマルクス理論家たちのCR論に係る論文および論点については、上記紹介のブラウン等編集の著書における各章を参照して頂きたい。(Brown et. al. (eds.) 2002)

2) RD I = MMC については、論証の必要がない程簡単に同意が取れそうである。それでも、ロバーツは RD ≠ MMC にこだわるが、彼は RD II ≠ MMC と考えているからである。そして RD II が、抽象化を超える程の「(観念である) 思考」の重視、最初から「(あらかじめ作成された) モデル」による「超事實的なもの」把握（これは「カントの残滓」と言われたり、MMCの「異端」理論すなわち論理-歴史的方法の一方向的な「線型的運動」の方法と言われたりする）等を重要視して、専ら RD II を批判し、返す刀で「MMCはそのようなRDとはちがう」とするのである。しかし、逆にいえば本来、資本制社会／生産様式を動態としてまさしく弁証法的に把握しようとしていた『資本論』において、その（生成／因果）メカニ

ズムを把握できない、ということはある得ないのである。したがって、如何に RD II としては明示化されていないとしても、潜在的に存在する筈の（生成／因果）メカニズムの把握としての RD II を MMC が内包していると考え、その析出が本稿の課題である。

3) MMC の RD II があれば、そこで同定される「超事實的」な實在的ドメインとしての（生成／因果）メカニズムには、「何らかの条件」が必要であるが、その内容については拙稿の見田石介からの引用を参照して頂きたい（木田 2016、見田 1963）。本来『資本論』の大きな目的は、資本制生産様式を明らかにし、さらにはそれにより資本制社会（関係）を浮かび上がらせることであつた。したがって生産様式さらには社会を歴史的に生成している動因を科学的に同定するというのが本来の研究企図であり、CR 論の RD とはそこにおいて違はない。しかし、具体的な科学の方法としては RD と MMC には差異がある。とりわけ、歴史的な生成過程における運動を析出する方法においてそうであろう。

4) 元は、出来事を生成させている實在的ドメインの構成要素である構造／関係も、「超事實的」であつただろう。しかし比較的「靜態的」な構造／関係については、可視化し得る科学技術等が発達すれば、經驗的な認知がやがて可能になると考えられるし、また歴史的経過を見ればそうであつた。そこが「動態的」な特性である（生成／因果）メカニズムと異なる所であろう。

5) MMC における「超事實的」なものと、RD の實在的ドメインにおける「超事實的」なものと同じあるいは重なりを持つのかどうかについては、より深い検討が必要であろう。しかし、「超事實的」なものの論争的性格については、MMC における今までの概念論争の大きな部分を構成してきた。すなわち、超歴史的（歴史貫通的）な概念をめぐる、例えば一般的な抽象概念としての商品や価値や労働をめぐる論争を振り返ると、商品を論理＝歴史的に捉える方法が、ロバーツをして「CR 論および RD は、『線型的運動』の方法であり、MMC とは違う」という考えを肯定させてきたのであつた。

6) CR 論の「階層性」ということでは、アーチャーの「分析的二元論＝社会（構造）と人間（エージェント）」、「社会構造／社会的相互行為と文化構造／文化的相互行為」、「人間＝人格とエージェントと行為」、に見られる人間、社会、文化等の階層性（Archer 1995（佐藤訳 2007））、そしてバスカーの「心」を「共時的創発的唯物論」として「生理的階層（中枢神経）」と「心理的階層（心的現象）」の二階層に交差して把握しようとする提起（Bhaskar 1975（式部訳 2006））等の研究をさらに進める課題があろう。

引用文献・参考文献

Archer, M.S. “Realist Social Theory : the Morphogenetic Approach” Cambridge University Press, 1995 （佐藤春吉訳『實在論的社会理論-形態生成論的アプローチ-』青木書店、2007）

Bhaskar, R. “Realist Theory of Science,” Verso, 1975 （式部信訳『科学と實在論』法政大学出版会、2009）

Bhaskar, R. “The Possibility of Naturalism” HarvestPress, 1979 （式部信訳『自然主義の可能性-現代社会科学批判-』晃洋書房、2006）

Brown, A., Fleetwood, S. and Roberts, J.M. (eds.) “Critical Realism and Marxism” Routledge, 2002 （Archer, M. S. et. al. (eds.) “Critical Realism: Interventions” B)

in this book

§1 Brown, A., Fleetwood, S. and Roberts, J.M. (eds.) ‘The marriage of critical realism and Marxism: Happy, unhappy or on the rocks?’

in this chapter

§ §1 Critical Realism: Augmenting Marxism (Fleetwood, S.)

§ § 2 Marxism does not require the services of critical realism (Roberts, J. M.)

§ § 3 What contemporary Marxism can learn from critical realism (Brown, A.)

§ 4 Fleetwood, S. ‘What kind of theory is Marx’ s labour theory of value? A critical realist inquiry’

Danermark, B. et. al. “Explaining Society: Critical Realism in the Social Sciences” Routledge, 1979 (Archer, M. S. et. al. (eds.) “Critical realism: interventions” A) (佐藤春吉監訳『社会を説明する』ナカニシヤ出版、2015)

Moseley, F and Campbell. M. (eds.) “New Investigations of Marx’ s Method” Humanities Press, 1997

in this book

§ 1 Arthur, C. ‘Against the logical-historical method: Dialectical derivation versus linear logic ‘

Sayer, A. “Method in Social Science: A Realist Approach, 2nd edition” London: Macmillan, 1994

木田融男 「批判的实在論とリトロダクション—マルクス理論との関連で—」立命館大学社会学研究科：先進プロジェクト研究『中間報告レポート』、2015A

同 「格差社会と階級理論—批判的实在論を通して—」櫻井純理他編著『労働社会の変容と格差・排除—平等と包摂をめざして』ミネルヴァ書房、2015B

同 「批判的实在論とリトロダクション—社会科学方法論の比較から—」『産業社会論集、批判的实在論特集』第51巻第4号、立命館大学産業社会学会、2016

見田石介『資本論の方法』弘文堂新社、1963

見田石介『宇野理論とマルクス主義経済学』青木書店、1968

3. 杉本通百則（担当教員）

批判的实在論と弁証法的方法

杉本通百則

本年度は、主として批判的实在論の科学方法論をヘーゲルの弁証法的方法から批判的に検討した。その内容は下記の通りである。

I 批判的实在論における科学方法論

1. 科学的推論の4つの様式

演繹とは、普遍的なもの(所与の前提)から特殊的なものを論理的に導く推論様式であり、その限界は、結論が前提の内部に含意されているため、実在に関する新しい知識を付加するものではないことにある。帰納とは、個別的な諸現象の観察から普遍的なものを導く推論様式であり、その限界は、経験の一般化・規則性という結論だけに制限されることにある。アブダクションとは、概念枠組・理論による現象の再解釈/再文脈化を行うことであり、その限界は、結論が真であるか偽であるかを決定できないことにある。リトロダクションとは、具体的なものを出発点として出来事の経験的観察から超事実的条件(構造・メカニズム)に関する概念化を行うことであり、その限界は、妥当性を評価する安定的な基準が存在しないことにある。そして実験に対する5つの強力な方法論的代替戦略(普遍的方法是は存在しない)として、①あるものをその対立物との関係で検討する「反事実的思考(弁証法的思考)」、②物事の秩序を脅かすことによってある行為を呼び起こすあるいは想像する「社会実験・思考実験」、③諸条件が挑戦を受けメカニズムが妨害されるような事例を分析する「病的(危機的)事例研究」、④メカニズムがほとんど純粋な様式で存在しているような事例を分析する「極端な(純粋)事例研究」、⑤全く異なる相互作用状況と比較することで偶然的な差異を選別するための基礎を提供する「比較事例研究」などが存在し、科学とは個別的・特殊的なものから一般的・普遍的・抽象的な实在論的概念を導くものである。

2. 説明的社会科学(2つの説明モデル)

第1に、ポパー—ヘンペルの説明モデルは、演繹と帰納により、因果性についての経験主義的法則・規則性を導く説明モデルであり、実在を出来事や経験的観察のドメインに還元する経験主義的存在論(単なる法則類似的・統計学的関係)に基づいている。第2に、批判的实在論モデルは、アブダクションとリトロダクションにより、因果メカニズム(対象の性質)の記述・概念化を導くモデルであり、具体的なものから抽象的なものに向かい、そしてまた具体的なものに戻るような運動のかたちで提示される。すなわち、具体(段階1:質的・量的方法による現象の記述)から抽象(段階2:現象を一連の想定可能な因果的構成要素にする分析的分解, 段階3:構成要素を理論的に再記述するアブダクション, 段階4:本質的な構成要素やXの可能な条件を探究するリトロダクション, 段階5:メカニズムと構造について相対的な説明力を精査検討し評価する異なる理論と抽象の間の比較), 抽象から具体(段階6:異なる構造とメカニズムが具体的状況の中でどのように自らを顕在化させるかの具体化と文脈化)へと研究が展開される。批判的实在論は「構造」「階層性」「複雑系」「創発」など、ヘーゲル論理学にはない新たな論理のカテゴリーを取り入れており、かつ科学研究に役立てようとする実践的な問題意識が強い。

II ヘーゲル弁証法からみた批判的实在論の科学方法論に関する若干の論点

ヘーゲル弁証法と批判的实在論に共通する問題意識としては、第1に、経験主義、実証主義、相対主義、主観主義、社会構成主義などに対する根本的批判であり、第2に、経験科学の方法(演繹・帰納)に対する軽視ないし否定である。一方で、ガリレイやベーコンの経験主義(帰納)やデカルトやスピノザの合理主義(演繹)など近代の経験科学は絶大な意義を有しており、中世の神学的・スコラ的認識から科学に実証的かつ合理的な基礎を与え、近代自然科学の成立につながった。「地動説」は徹底した能動性な経験的観察から生まれたのである。またニュートンの万有引力の法則は経験のドメインで帰納的に導かれたものであるが、後にアインシュタインの一般相対性理論(实在のドメイン)から演繹的に導かれたものと近似の法則(メカニズム)を発見している。アインシュタインの質量とエネルギーの等価性($E=mc^2$)は特殊相対性理論(实在のドメイン)から演繹的に導かれた結論であるが、後に超ウラン元素の発見をめぐる核分裂実験(アクトチュアルなドメイン)で独自に再発見(証

明)された。自由競争段階の利潤率低下の法則を古典派経済学は経験的・帰納的に発見したが、マルクスは同じ法則を資本概念からの必然的現象形態として展開(証明)した。

ヘーゲル論理学の根本的欠陥としては、第1に、認識過程と事物の客観的な運動過程との区別がないこと、第2に、経験科学の方法(与件、分析、総合)の意義や偶然性を一切認めないことである。すなわち「概念の自己展開」という観念的方法(客観的観念論)であり、かつ没落・死滅する発展(矛盾)の側面をみない調和の世界であり、否定性は必ず肯定性によって包括される(バスカー「存在論における不在概念の不在」)。一方で、批判的实在論における弁証法的方法の欠如である。弁証法とは、諸現象の動的(発生的・発展的・有機的)把握の方法である。批判的实在論の制限は、第1に、分析的方法と総合的方法のみで経験科学の領域にとどまっていること、第2に、具体的なもの(経験のドメイン)から抽象的なもの(实在のドメイン)へ「下向の方法」を強調するあまり、抽象的なものから具体的なものへの「必然性」を証明する方法が弱いことであり、事物の必然性や発展(矛盾)、法則の階層性をとらえるものではないといえる。

1. 論理のカテゴリーをめぐって(論理のカテゴリーの限定・固定化の問題)

批判的实在論によれば、科学の仕事は、知覚できない事物の内的構造・生成メカニズム＝事物の性質(因果的効果能力)を発見することであり、構造的に作用する因果的力、生成メカニズム、傾向性から出来事を説明することにある。しかし批判的实在論における「構造」「性質」「(必要)条件」「因果性」「力」「メカニズム」「傾向性」といった論理のカテゴリーのそれぞれの位置づけ(意義と限界)が必ずしも明確ではない。また無機的・機械的なものも有機的なものも同じ論理のカテゴリー(形式的同一性)で把握しているが、「力」「極性」「波動」など、研究対象の本性に於いて論理のカテゴリーを発展させる必要があるといえる。

第1に、「条件」という論理のカテゴリーは、可能性にしかすぎない。根拠と(外的)条件がそろって現存在する。全ての条件がそろおうかどうかは全くの偶然であり、その条件を自ら生み出す実在的可能性とは区別される。たとえば脱原発は運動(条件)だけで実現されるのではなく脱原発が実現可能な根拠が条件とは別にある。商品の根拠は使用価値であるが、その(外的)条件は私的所有に基づく相互他人的関係にある。資本の根拠は商品であるが、その(外的)条件は二重の意味で自由な労働者の創出にある。

第2に、「法則」とは、二つのもの間の必然的関係を意味するが、二項の関係といっても普遍と特殊、内容と形式、実体と形態、根拠と条件、本質と現象、力とその発現、原因と結果など多様な内容がある。たとえば①規則性としての差異的な関係(二項の肯定的統一)、②相互前提関係の法則(二項の否定的統一)、③矛盾としての法則、④発展法則(有機的統一)などがある。

第3に、「力」というのは、発現されて初めてとらえられ、力であることを示す。また作用しない力はない。人間の筋力から物理学上の力という概念が現われ、それが論理学上の普遍のカテゴリーとして客観的現象に適用されるようになったが、機械的運動の力のみがその発現の質と量を(質量と加速度により)規定することが可能とされた。たとえば「労働力」概念により、労働そのものとその発現とを区別したことが剰余価値の秘密の発見につながるなど有用性がある一方で、生命力、消化力、記憶力など運動や変化を引き起こす原因不明のものを力で説明するなど、力はある意味で同語反復である。

第4に、「因果性」は必然的関係をつかむ論理のカテゴリーであり、可能性を現実性に転化させるものが原因である。現実はいつでも相互作用であり、多くの諸原因の複雑なからみあいであるが、その必然的連関のうち、一番単純で抽象的・機械的な一側面(部分)が因果関係である。一方で、因果性の制限としては、①事物の必然性やその創造・変化・発展をつかめない。②因果関係は同語反復であるという一面をもつ(結果とは原因の表明である)。③同じことの原因でもあれば結果でもある(相乗効果・循環論)。④結果が原因をだめにす

る。⑤同じ原因が二つの互いに反対の結果を生む（矛盾の側面）。たとえば万有引力の法則（原因）は初速を与件として天体運動（結果）を説明するが、原因そのものは初速を少しも含んでいない。雨（原因）が湿気（結果）をもたらすのは原因には含まれない大気や土壌を前提としてのことである。細菌（原因）は一定の自然的・身体的条件の下で病気（結果）を引き起こすが、原因そのものはそれらの条件を少しも含んでいない。雨（原因）と湿気（結果）、万有引力の法則（原因）と天体運動（結果）、細菌（原因）と病気（結果）、生産力の発展（原因）と相対的剰余価値生産の拡大（結果）はある意味で同語反復である。貧困が差別を生み、差別が貧困を生む相乗効果・循環論になる。富は奢侈の原因であるが、奢侈が富を破壊する、労賃の上昇は利潤の減少の原因であるが、利潤が減少すれば労賃は下落するなど、結果が原因をだめにする。

第5に、「傾向性」というカテゴリーの問題である。バスターのいう傾向概念とは、①事物の超事実的作用の可能性（発現していない力）であり、②事物にそなわった持続的な指向性（存在論的選好）のことであり、開放システム（複合性・多様性）における重層的多元的因果連関（相互前提関係）を強調する概念といえる。しかし傾向性にも程度の差があると考えられる。たとえば人は老化（内部矛盾）によって死ぬが（外的）事故によっても死ぬ（どこまでも偶然性を認める）。公害は市場の偶然的な失敗なのかそれとも必然的現象なのかという関係を傾向性は曖昧にするおそれがある。価値があれば必然的に価値形態をとるなどの必然的関係も同様である。

2. 普遍—特殊—個別の弁証法的同一性をめぐって

第1に、本質（實在）は現象（経験）する。経験科学（形式論理学）では普遍的なもの（抽象的普遍）と特殊なものは互いに外的であり、偶然的である。たとえば使用価値（抽象的普遍・類）と価値（特殊・種差）では商品の必然性を説明できない。一方で、普遍は特殊である。具体的普遍（概念）は特殊として実在するし、知覚できる。単なる共通性としての抽象的普遍（形式論理学の概念）は具体的なものとして実在するものではないが、具体的普遍（特殊なものを自ら生み出す主体）は包括的な特殊のモメントとして実在する。有機的事物は自分自身の主要な契機（部分・特殊）であると同時に全体（普遍）でもある。たとえば貨幣（特殊）は商品（普遍）であると同時に商品（普遍）は貨幣（特殊）である。産業資本・商業資本・利子生み資本（特殊）の資本一般は産業資本（普遍）であると同時に資本一般（普遍）は産業資本（特殊）として実在する。機械は原動機、作業機、伝導装置から構成されるが、作業機こそが機械を道具と区別する主要なモメント（全体を包括する普遍）であり、かつそれ自体特殊な構成要素として実在する。

第2に、事実判断は価値判断である。ヘーゲルは「価値判断こそ最高の事実判断である」として、価値判断の基準を主観的に外部に求めるのではなく、客観的な事実そのものの中にあるとした。事物の本質を明らかにすること（現象形態に過ぎない）、普遍的とされた事物を特殊なものとしてより普遍的なものに解消すること、有機的事物の生成・発展・死滅の運動法則を明らかにすることが価値判断そのものである。たとえば剰余価値法則は特殊理論であると同時に一般理論であり、かつ規範理論（価値判断）でもある。地球を天体一般に還元することや人間を動物の一形態として把握することは価値判断でもある。

第3に、論理的矛盾をめぐり問題である。「矛盾」とは、相互前提関係であると同時に相互排除関係であり、論理的矛盾とは、「AはAであって同時に非Aである」という矛盾の表現様式のことである。それには、①現実の客観的矛盾を論理的矛盾として表す場合と、②認識の発展において認識が不十分なために論理的矛盾をおかす場合が存在する。主体（資本、生物、宇宙など）の運動は自己実現と同時に自己否定である。たとえば派遣労働の拡大は資本蓄積の条件であると同時に条件ではない。商品の交換過程は私的過程であると同時に私的過程ではない（社会的過程である）。資本（剰余価値）は流過程から生じなければなら

ないと同時に流通過程から生じてはならないなど、科学は既知の理論と経験的事実との矛盾によって発展する（認識発展の原動力）。バスカーは、「弁証法的矛盾は基本的に論理的矛盾ではない」として、論理的矛盾を記述しているが、論理的矛盾をおかしているわけではないとして、四面的弁証法（第一局面：「非同一性」、第二界面：「否定性」、第三水準：「全体性」、第四次元：「行為者性」）により説明している。

以上が今年度の研究報告の概要である。次年度の研究計画としては、第1に、バスカーの『弁証法』の批判的検討である。今年度は批判的实在論における不在概念の弁証法的発展の内容については十分に扱うことができなかつた。第2に、批判的实在論による環境論研究の具体的検討である。

.....

4. 松田亮三（担当教員）

2016年度研究のまとめ

松田亮三

2016年度は、批判的实在論を用いた社会疫学研究について、特に先行する Eastwood らの研究を中心に検討し、その成果を産業社会学部論集に掲載した（報告時において印刷中）。その概要は以下の通りである。

この20年間で社会疫学は確立した学術領域となっているが、そこでは理論をどのよう

に構築していくかが大きな課題となっている。つまり、社会経済的地位と健康状態とのあるいは地理的な要因との統計的関係を指摘するだけではなく、それがどのように関係することになっているのかというメカニズムの解明が社会疫学に求められている。本論文では、社会疫学における理論の構築を目指し、その哲学的基礎に批判的实在論を用いている John Eastwood の一連の論文を検討する。最初に、近年提案された批判的实在論にもとづく理論構築に向けた研究プロトコール、すなわち説明的理論構築法を概観した。この方法は、創発フェーズ、構築フェーズ、確証フェーズという三つのフェーズを含んでおり、それぞれのフェーズで用いられるべき研究活動が示されている。次に、具体的研究の例として彼らが進めてきているシドニー南西部における母親の産後うつ病の生成メカニズムの探求に関わる一連の研究を検討した。最後に、批判的实在論をふまえて、理論構築に向けたいくつかの課題を指摘している。

.....

5. 野村 優 (受講生 社会学研究科博士後期課程3回生)

批判的实在論における「科学的発見の論理構造」について

野村 優

先進プロジェクト研究(SH)においては、批判的实在論をテーマに研究を行ってきた。なかでも、批判的实在論を扱った『社会を説明する』という著作をとりあげて、日本語訳を出版したり、著者を日本へ招いて講演会を開催したりするなどを行ってきた。しかしながら、筆者は、『社会を説明する』に示されたインテンシヴ・デザインとエクステンシヴ・デザインという区別を踏まえつつも、さらにそれを再検討することに取り組んできた。そこで、今回のレポートではなぜそうした再検討が必要であると考えたのかを明らかにしたい。

ここであらかじめ、その概要を示しておく、インテンシヴ・デザインとエクステンシヴ・デザインの両者を単に分類することではなく、両者の本質的な違いを踏まえて組み合わせることに重点が置かれるべきだという点はその理由にあたる。さらには、批判的实在論の提唱者である R. バスカーの「科学的発見の論理構造」に即して考えたときには、その第二段階に留まっているところに『社会を説明する』におけるインテンシヴ・デザインとエクステンシヴ・デザインという区別の難点がある。

そもそも、批判的实在論に限らず、より一般的な科学論においても、日本語では「内包的」とも訳される「インテンシヴ」は質的研究に関わるものとして、対して、「外延的」とも訳される「エクステンシヴ」は量的研究に関わるものとして扱われている。そして、両者を組み合わせることに取り組むということまでは、『社会を説明する』と筆者の考えは一致している。さらに、ある存在が潜在的にもっている「生成メカニズム」を明らかにすることが科学の役割であると考えるところも一致している。しかしながら、『社会を説明する』が生成メカニズムを発見するインテンシヴ・デザインに重点を置く一方で、筆者は生成メカニズムを発見することだけでなく、それとエクステンシヴ・デザインにおいてメカニズムを検証することを組み合わせることを重視することに違いがある。なぜ、そのように検証についても含めて考えるのかという理由は、批判的实在論の提唱者である R. バスカーが示した、批判的实在論のマニフェストがそうした構成になっているからである。

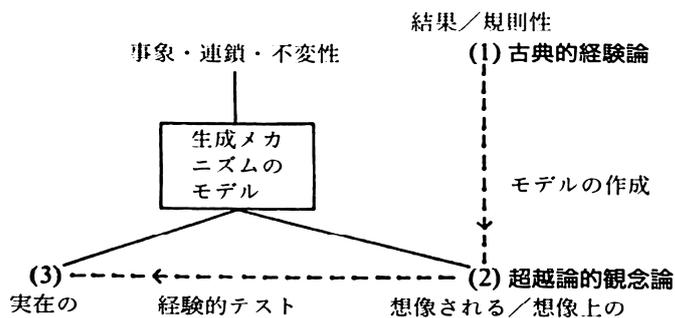


図 1. 科学的発見の論理構造 (『科学と实在論』五頁)

科学的発見をめぐるには、次のような一種独特の弁証法が展開される。まず、ある一連の事象の規則的発生が同定される。次いでその規則性の仕組みを明らかにするための理論的説明が考案される。最後に、理論的説明の中で想定された存在物や作用の实在性が点検される。『科学と实在論』四頁

より詳細な説明こそないが、『科学と实在論』の冒頭に示された上図の「科学的発見の論理構造」は、科学的方法におけるバスキアの基本的な想定を簡潔に示している。確認しておく、科学的発見は次に示す三段階において展開されると考えられている。第一段階は、現象として確認されたレベルでの規則性の同定である。そして、この段階に留まって科学を行おうとすることは、「古典的経験論」と表現されている。つまりは、批判的实在論でいうところの「存在論的深さ」を想定せず、経験的な規則性と潜在的なメカニズムを同一視する考え方である。

つづく、第二段階は、ある経験的な事実を基にして観念的なモデルを作成することである。このことは、「実験によりある特定の現象が観察されると、その現象の生成メカニズムを的確に捉えるための理論モデルがつくられる」(『科学と实在論』六頁)という記述からも裏付けられる。つまりは、理論モデルとしての生成メカニズムを発見することにあたる。そして、この段階に留まることは、「新カント派」や「超越論的観念論」とされている。さらに、第三段階は、第二段階で提出された理論モデルを経験的なテストにかけることにある。そして、これまでの科学哲学の歴史的展開を踏まえたときには、この第三段階こそが批判的实在論の立場として示されている。「しかし、超越論的实在論の場合、新カント派とは異なり、さらに一歩進めて、理論的メカニズムの实在性が経験的にテストされ、科学的手続きは第二段階から第三段階へと進展していかなくてはならない」(『科学と实在論』六頁)とされている。あるいは、「超越論的实在論は、第二段階で仮説的に示された理論的メカニズムを単に想像上のもとして捉えるのではなく、それを实在したものにとらえ(さらにその認識可能性を認め)る点において、超越論的観念論とは大きく異なる」(『科学と实在論』六頁)とも記述されている。

以上のような批判的实在論のマニフェストを踏まえたときには、想定された生成メカニズムを検証する「科学的発見の論理構造」の第三段階に重点が置かれるべきである。その点で、生成メカニズムの発見を重視する『社会を説明する』は、第二段階に留まっている印象を与えかねない。

しかしながら、筆者の立場は『社会を説明する』に示された考えを否定するものではない。つまりは、生成メカニズムの発見よりも生成メカニズムの検証が重要だとは考えない。なぜならば、そもそも、生成メカニズムの発見がないと検証することも不可能だからである。そ

のために重要なのは生成メカニズムの発見と検証の双方を踏まえることである。さらには、第一段階である古典的経験論へと戻ってしまわないように、そうした区別を単なる分類として示すのではなく、過程や段階を示すものとして捉えることが大切である。つまりは、従来まで分類的な区別と考えられてきたインテンシヴ・デザインとエクステンシヴ・デザインの区別を価格論的発見の各過程を表すものとして捉えた上で、その全体を考えることが重要である。

参考文献

Bhaskar, R. A. (1997) [1975], *A Realist Theory of Science*, London: Verso. (=『科学と実在論——超越論的実在論と経験主義批判』、式部信 訳、法政大学出版局、2009年)

Danermark, B. (2002). *Explaining society: An Introduction to critical realism in the social sciences*. Hoboken: Taylor and Francis. (=『社会を説明する—批判的実在論による社会科学論質的・量的アプローチをつなぐ研究デザイン』、佐藤春吉 監訳、ナカニシヤ出版、2015年)

.....

6. 中澤 平 (受講生 社会学研究科博士後期課程 2 回生)

2015 年度末先進 P 報告書 (中澤平)

階層性に立脚した因果関係の同定にむけて

筆者(中澤)は、これまでの先進プロジェクト研究の成果として、今年度産社論集(第51巻第4号)に「メカニズムの発見およびその同定基準について——バスカーの科学哲学を足がかりとして——」と題して論文を投稿、掲載させていただくことになった。本報告書では、上記の論文について改めて振り返るとともに、今後の課題についても整理しておきたい。

上記の論文で出発点とした問いは、科学において因果関係が発見され同定されるとはどういうことなのか、ということである。つまり、何を発見し同定すれば因果関係を同定したことになるのか、という問題である。この問題に関してバスカーは「メカニズム」という概念で論じており、上記論文ではこのバスカーのメカニズム概念をめぐって一解釈を提示した。

バスカーによれば、出来事 A と出来事 B の生起連鎖が必然的なものであるというためには、そこに何らかの因果法則がなければならぬが、その因果法則のことを指してバスカーは「メカニズム」と呼んでいる。ただし、この出来事と出来事との生起連鎖そのものはメカニズムではない。むしろ、出来事と出来事との生起連鎖はメカニズムの結果である。つまりある出来事 A の背後にメカニズムが存在していて、このメカニズムが作用した結果、出来事 B が生じたというわけである。そして、メカニズムと出来事は存在論的に別の次元に位置するものとして措定される。以上の点について、バスカーは実験の科学哲学的分析を通して論証しているが、詳しくは上記論文を参照していただきたい。

いずれにしろ、バスカーによれば因果関係を発見し同定するとは、メカニズムを発見し同定することに他ならないが、上記論文で筆者はメカニズムを発見し同定するとは、次のようなことであると論じた。すなわち、ある出来事についてそれを説明するメカニズムを発見するとは、実在の階層性のなかにあつて、ある階層で生じた出来事との生起連鎖に焦点を当てて、その生起連鎖が可能であるための根拠を下位の階層に求めることであると。

ここで先に階層性という概念について触れておこう。例えば、水などの物質はある分子の

かたまりのことであり、水ならば H_2O ということになるが、この H_2O は H (水素) と O (酸素) という原子から成り立っている。さらにそれぞれの原子も、陽子や電子、中性子から成り立っている。そしてさらにそれらの陽子や電子、中性子もさらにミクロな物質から成り立っている。このように、物質 (事物) は常にそれ自体が様々な物質 (事物) からなる構造体である。実在世界はこうした入れ子状のような秩序を持っているわけであるが、このような入れ子状の秩序を指してバスターは階層性と呼んでいる。

つまり、実在は無限に階層的に成立しており、その階層的秩序のなかで出来事の森羅万象が生じているが、ある階層で生じた出来事の生起連鎖を被説明項としたとき、その被説明項を説明するのはしばしばその下位の階層に存在する事物 (メカニズムの物質的根拠) であり、その事物の作用様式を指してバスターはメカニズムと呼んでいるわけである。したがって、メカニズムを発見し同定するとは、ある階層で生じた出来事の連鎖を出発点として、そこから (しばしば) 下位の階層に下降していくことを意味している、ということである。たとえば、——これは上記論文でも用いた例なのだが——アヘンを吸引するとその人は眠る、という出来事と出来事の生起連鎖でいえば、その出来事を説明するメカニズムはアヘンないしはアヘンが具有する化学物質 (モルヒネなど) である。アヘンを吸引すると眠るというのは生理的階層に属するものであり、それを説明するアヘンの性質は化学的階層に属するものである。つまり、ここでは生理的階層の下位に化学的階層が位置しているのであり、生理的階層で生じた出来事を説明するためには化学的階層に下降しなければならないのである。ただし、もちろん生理的階層に作用している要因は化学的階層に限定されない。力学的要因やその他様々な階層に属するメカニズムが生理的階層で生じる出来事の制約要因や誘発要因として作用しているだろう。ただ、たいていの場合研究者にとってその出来事の説明をするために重要になるメカニズムは、一つ下の階層に位置しているということである。そして社会と人間についても、そうした階層の関係があてはまる。ただしこの場合、必ずしも社会の階層で生じた出来事を説明するのが人間という階層に属するメカニズムだというわけではなく、むしろ人間の階層で生じた出来事を説明するのが社会的階層に属するメカニズムである。たとえば、私がスーパーに行き行って買い物をするという出来事についてみたとき、その出来事が成立するためには (社会的階層に位置するメカニズムである) 市場法則が働いていなければならない。すなわち、「その人がなぜそのような行為をしているか」を説明するためにはしばしば社会的階層に属するメカニズムを明らかにしなければならないのである。

このように、ある階層から別の階層に渡って「なぜそうした出来事が可能であるのか」を説明することを、バスターは「説明的還元」と呼んでいる。ところで、「階層性」において重要なことは、下位の階層と上位の階層との間には「創発性」があるということである。つまり、ある事物 A は下位の階層に属する事物 a から成り立っているが、その性質については事物 a と同様ではない、ということである。水の例でいえば、 H_2O は火を消すという性質を持っているが、その構成物質である水素と酸素は火を消すという性質をもっていない。つまり、事物 A には、当の事物を構成している事物 a には還元することができない性質を具えているのであり、これをバスターは「創発性」と呼んでいる。社会と人間との場合においても同じことが言える。社会を構成しているのは人間であり、人間の存在なくしては社会は存在しえないが、社会的階層で働いているメカニズムは人間的階層で働いているメカニズムとは別個であり、人間的階層で働いているメカニズムを解明することと、社会的階層で働いているメカニズムを解明することとは別である。たとえば、私が今日スーパーに行き行って買い物をする理由を解明したところで、市場法則を解明したことにはならない。社会的階層で働いているメカニズムを人間的階層に還元することはできないのである。この「創発性」という議論から、バスターは様々な現象は原子的事物に還元することが可能であるとする「還元

主義」を批判し、社会学の文脈では社会的現象を個人に還元して説明しようとする「方法論的個人主義」を批判している。

では、この「還元主義批判」と「説明的還元」とはどのように整合的に解釈できるのだろうか。バスカーは一方では、階層間の創発性を強調し、還元の不可能性を論じているが、他方で出来事とメカニズムという枠組みの内実をよく見ると、それはある階層で生じた現象を他の階層に存在するメカニズムによって説明するという他にない。もちろん、出来事をメカニズムによって説明するとは、ある出来事の連鎖が可能であるための前提条件のひとつをあるメカニズムによって説明するということであり、その出来事は当のメカニズムによって説明されつくされるわけではなく、むしろある出来事は様々なメカニズムの協働作用の結果であるということであるし、ましてやその出来事とメカニズムとが融解して同一のものになるということではない。したがって、説明的還元とは、ある出来事の生起連鎖がある一つのメカニズムによって説明しつくされるということでもないし、ましてやある出来事の連鎖が特定のメカニズムの説明に解消するということでもない。この意味では、「ある階層の出来事を別の階層のメカニズムによって説明する」という説明的還元は素朴な還元論とは異なる。しかし、個々の研究においては、説明的還元の枠組みに立脚したとしても素朴な還元主義に立脚したとしても、ともに「ある階層の出来事を別の階層によって説明する」ということには変わりはない。したがって、説明的還元と（バスカーの批判している）素朴な還元主義とがどのように区別されるのか、さらには説明的還元立脚した説明と、素朴還元主義立脚した説明とがどのように区別されるのか、という点がより明確にされなければならない。上記論文では、この点については十分に解明することができなかった。今後の課題としたい。

.....

7. 大月功雄（受講生 社会学研究科博士後期課程1回生）

文化研究と批判的实在論

大月功雄

本年度の先進プロジェクト研究では、「批判的实在論 (critical realism)」の文化研究への応用可能性について検討してきた。とりわけ 1980 年から 90 年代にかけて文化研究の興隆をもたらした「文化論的転回 (cultural turn)」の課題を明らかにし、批判的实在論の「創発性 (emergence)」に基づく存在論がいかに現代の文化研究に貢献できるかについて考察を深めてきた。その考察過程は、拙稿「文化研究と批判的实在論——文化論的転回後の文化研究のために」『立命館産業社会論集』(第 51 巻 4 号) としてまとめた。

ここでは、まず文化論的転回の諸相について、ニュー・カルチュラル・ヒストリーとカルチュラル・スタディーズの展開に即して概観した。文化論的転回が構造主義やポスト構造主義の諸理論を手がかりにしながら「文化的なもの」がもつ独自の構成力を救い出すことによって、例えば、社会的・経済的カテゴリーであった階級を文化的カテゴリーへと移行させ、さらには階級とは異なるジェンダー・セクシュアリティやエスニシティなどの文化的アイデンティティをめぐる新たな文化研究を切り開くなどしてきたことを確認した。

だが、文化論的転回はその内に「文化的なもの」とそれ以外のものとの境界を不明瞭にさせる問題を含んでいたため、批判的な再考を余儀なくされているとして、今日の代表的な三つの立場を取り上げた。ここでは、第一にテリー・イーグルトンのように「文化的なもの」

から「物質的なもの」への原点回帰を提起する立場、第二にはジェフェリー・アレクサンダーらのアメリカ文化社会学にみられるような「物質的なもの」からの「文化的なもの」の更なる純化を主張する立場、そして第三に最も多い意見として「文化的なもの」とそれ以外の「社会的・経済的なもの（物質的なもの）」との関係を再定義しようとする立場、に整理することができた。そして、この第三の立場こそが文化と社会の存在論的階層の違いを重視する、すなわち「創発性」に基づく存在論を展開している批判的实在論と課題を共有していることを確認した。

その上で、文化論的転回後の文化研究を展望するために、まずは、文化論的転回の中にみられた文化構造と主体の関係について、批判的实在論による把握を試みた。ここでは、批判的实在論による構造と主体の存在論的位置をめぐる問題整理を通じて、文化論的転回の前後にみられた文化概念への二つの視座——つまり、主体が文化構造を生み出すという視座と文化構造が主体を生み出すという視座——が、決して二者択一のものではなく、構造と主体のそれぞれの創発性を認め、両者を時間的経過のなかで関係付けることによって、はじめて文化の再生産と変化の過程をより整合的に把握しうるものであることを明らかにした。

そして最後に、文化論的転回が「文化的なもの」と「社会的・経済的なもの（物質的なもの）」の境界を不明瞭にさせたというもうひとつの問題を扱った。ここでは、批判的实在論の創発性概念に基づき、「社会構造」「文化構造」「主体」のそれぞれの創発的特性の同定を試みたマーガレット・S・アーチャーの社会理論を示した。すなわち、第一に社会構造は既存の物質的資源をめぐる利害関係によって主体を条件づけるもの、第二に文化構造は既存の論理的関係によって主体を条件づけるもの、第三に主体は個人レベルでは諸構造を捉え返す力として反省的な自己意識を有し、集団レベルでは諸構造を無自覚的ないし自覚的に変容させる組織であるもの、というそれぞれの創発的特性をもった存在として把握された。こうして批判的实在論を通じて主体は社会構造と文化構造の二重の条件付けのなかで行為なり解釈を行なうのであり、それら三者はいずれも他に還元できない独自の因果的力を有したものとして扱うことができることを提示した。

本年度は、以上のように文化研究における批判的实在論の可能性について検討を進めてきたが、残された課題は多い。まず現代の文化研究の課題を文化論的転回から浮き彫りにしようと試みたものの、その文化研究の多様さと「転回」の含意はより包括的かつ慎重に検討していく必要があった。また今回扱った批判的实在論による文化・社会・主体の存在論はあくまで議論の出発点を越え出でならず、その文化研究がこれまでよりも説明力をもった文化研究たり得るかは、今後の実際の展開のなかで試されなければならないだろう。これらは今後の検討課題として引き続き深めていきたい。

.....

8. 石 宸 (受講生 社会学研究科博士前期課程 2 回生)

先進プロジェクト研究 批判的实在論 2015 年年度末レポート

——世界を認識する——

石 宸

私は先進プロジェクトに入る前、哲学について考えたことがなかった。今から見ると、そのとき、私の研究、更にもその考え方までずっとプラグマティズムのレベルであった。使える

ものこそ、価値があると考えた。批判的实在論に接触以来、私は「世界及び研究を認識すること」を思考し始めた。批判的实在論が私にとっては「新世界の扉を開いた」ようである。

批判的实在論は20世紀70年代に、イギリスの哲学者ロイ・バスカーによって創始され、40年をかかって、発展してきたメタ理論である。「批判」はこの理論の全体的特徴であり、「实在論」はこの理論の基本的立場である。批判的实在論は実証主義への批判から生み出され、実証主義及びポスト実証主義以外の、社会科学・哲学の「三つ目の針路」と考えられている。

・实在の領域——経験はすべてではない

「世界をどう理解するのか」という問題に関しては、实在論は実証主義より進歩していると考え。その焦点は、「直接に観察・経験できない实在」を認めることである。バスカーは实在を三つの存在論的ドメインを提出した。いわゆる「経験のドメイン」、「アクチュアルなドメイン」及び「实在のドメイン」である。「経験のドメイン」は、我々が直接及び間接に経験できることで構成されている。実証主義はこれが「实在」と考える。しかし、人は有限の生命であり、有限の時間、有限の活動範囲及び有限の感知力を有している。それゆえ、直接または間接に経験できることは实在の一部でしかない。人が経験しなくてもこの世で起こっている「アクチュアルなドメイン」も世界の全部とは言えない。なぜなら、「メカニズム」が存在しているからである。メカニズムが存在しているから、「出来事」が出来る。しかし、「出来事」は常に出来るのではなく、特定の条件及び刺激により発動する。それゆえ、出来事が出来る出来ないにかかわらず、メカニズムは確かに实在している。

経験主義は「経験のドメイン」と「アクチュアルなドメイン」は世界のすべてであると認識し、「实在のドメイン」を見落としており、バスカーによって「認識論の誤謬」と呼ばれている。

・批判的实在論と形而上学

形而上学は、感覚ないし経験を超越出でた世界を真实在とし、その世界の普遍的な原理について理性的な思惟によって認識しようとする学問ないし哲学の一分野である。中国では、形而上学は二つの意味がある：①世界本質の見方②一方的な、孤立、静止の考え方

1949年中華人民共和国建国以降、1952年に、毛沢東は『矛盾論』を発表した。毛沢東は『矛盾論』の中で、このような考え方は、時代と環境の要素を加味できず、マルクス主義の単純コピー（「形而上学」、「教条主義」）だと強く批判した。毛沢東は「所謂形而上学的或は俗っぽい進化論の宇宙観は、孤立的、静止的、一方的な観点で世界を見る。この宇宙観は世界のすべての物事、すべての形と種類を永遠にお互いに孤立的で不変的であると考えている。変化があるとしても、それは数量の増減と場所の変更だけである。そしてこの増減と変更の原因は、物事の内部ではなく、外部にある、即ち外力の推進のためである」と述べている。その影響により、「形而上学」は今日に至るも中国では一般的には貶す言葉として使用されている。

批判的实在論は確かに形而上学的である。世界中の目で見えない、体で感じられない世界の实在（メカニズム）を探求するのであるから。しかし、「一方的な、孤立、静止の考え方」からは脱離している。その証拠の一つは、バスカーが実証主義の「自然主義」、いわゆる自然科学の研究法を社会科学の研究に応用するアプローチを改善したことである。

・批判的自然主義——牽一发动全身（些細な動きが全局に影響する）

バスカーは「創発（emergent）」理論の提出は、自然主義が社会科学の研究への応用に理

論的根拠を提供した。

バスターは創発特性が3つあると論じた。一つ目は、行為依存性 (activity-dependence) である。社会構造の存在は、それに影響され行為から独立していない。これは社会構造と自然構造の差別である。二つ目は、概念的依存性 (concept-dependence) である。社会構造の存在は、行為者の行為と観念から独立していない。社会構造は行為者達の観念も含んでいる。三つ目は、時空依存性 (space-time-dependence) である。社会構造は、相対的な永続性だけ有する。それゆえ、社会構造に現れた趨勢は、時空不変な普遍性を持っていない。

この創発理論は批判的自然主義の基盤である。批判的实在論のアプローチは生命がある。この全面的、連带的、運動的「形而上」は毛沢東が批判した「形而上学」の特徴と明らかに異なっている。むしろ、「孤立的、静止的、一方的」は「形而上学」のせいではなく、当時の形而上学の学者の問題であると考ええる。

・メカニズムと敵対性概念

批判的实在論は、マルクス主義を基盤とし、マルクス主義を支えるメタ理論であると言われている。マルクス主義は「実用面」であると言えば、批判的实在論は「思想面」であると考ええる。

マルクス主義者達は、「敵対性」(中国語は「矛盾」と翻訳されている、『矛盾論』の中の「矛盾」も「敵対性」を意味している)を重視している。毛沢東は『矛盾論』の中でこう述べている「矛盾即ち運動、即ち物事、即ち過程、そして即ち思想」。「敵対性」があるからこそ、生命が存続する。

両方とも裏にある批判的实在論が重視している「メカニズム」とマルクス主義が重視している「敵対性」は合わせて考えればよいだろう。メカニズムは構造であり、この世界の裏に綿密なネットを作り、物事を接続する。そして敵対性があることにより、ネットが動き、社会が運動的になり、出来事が生じ、世界が生命を得る。

・結語

人類の認識は常に一般から特殊へ、あるいは特殊から一般へ往復運動しながら進んでいる。毎回の循環も人類の意識を一層高め、より深くなる可能性がある。批判的实在論も実証主義への批判から生み出されるものである。世界をより深く認識してこそ、世界を改造することが可能になる。批判的实在論が私にとっては、ただの新たな理論であるだけでなく、自分の思考方式を変える鍵であると考ええる。

※本報告は私の理解であり、勉強不足のため、理解し間違えているところが多いかもしれませんが、先生に指摘されると光栄に思います。

参考文献

- [1] バース ダナーマーク, リセロッテ セコブセン, ジャン・Ch. カールソン, マッツ エクストローム, Berth Danermark, Jan Ch. Karlsson, Liselotte Jakobsen, Mats Ekström, 佐藤 春吉 (翻訳) (2015)『社会を説明する—批判的实在論による社会科学論』ナカニシヤ出版
- [2] 殷杰, 安箴 (2007)『巴斯卡的批判实在论思想——兼议社会科学哲学研究之第三条进路』《哲学研究》, 2007(9):96-102

[3]毛泽东 (1975)『矛盾論』人民出版社

[4]毛泽东 (1937)『实践論』

[5]『唯物主义辩证法终将代替形而上学—毛泽东哲学思想浅谈』

<http://wenku.baidu.com/view/63672f48e45c3b3567ec8b0e.html>

注

i)『岩波哲学小事典』「形而上学」の項目

ii) 陈世清：对称经济学 术语表 (四)

iii)

http://www.chinareform.org.cn/People/C/chenshiqing/Article/201505/t20150506_224534.htm

iv) ウィキペディア「形而上学」の項目

v)

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%BD%A2%E8%80%8C%E4%B8%8A%E5%AD%A6>
Jeffrey Issac , Power and Marxist Theory: a realist view , Cornell University Press , 1987, p.57.

.....

9. 溝口翔太 (社会学研究科博士前期課程 1 回生)

先進プロジェクト研究 (SH)

科学はどのようにあるべきか—自然主義と反自然主義—

社会学研究科 M1 溝口翔太

はじめに

現在、大学改革の中で、科学、とくに人文科学のあり方・存在意義が強く問われている。2015年6月に文部科学省から、人文学系学部の廃止・見直しを求める通知が出されたことが話題となった。それは、目に見える「成果」「実益」が現れにくい人文科学系よりも、「実学」をより重視する場、企業社会で活躍できる「人材育成」の場として大学のあり方を見直したいという「本音」を顕にした要請であった。また、そのような風潮を受けて、学生たち自身も、より社会から評価されるための学びを志向していくようになり、社会から評価を受けにくいような人文科学系の学問を軽視するようになっていく。かくして、大学が「就職予備校」化と揶揄される状況は進み、人文科学系の縮小化傾向は進んでいく。このような状況に置いて、科学・人文科学のあり方・存在意義を問い直し、社会の中に位置づけ直していく作業は、非常に重要となるだろう。

批判的实在論は、科学がどのような目的をもっており、社会にとってどのような意味があるのかということ哲学的な枠組みを用いて明らかにしている。そこには、文系学問が軽視される現在において、非常に学ぶべきものが多くあり、学問に関わる全ての人に対して、「どのようにあるべきか」ということを問うものである。

以下では、批判的実在論の創始者であるロイ・バスカーの『自然主義の可能性』と批判的実在論のテキストとして書かれたバース・ダナーマークらの『社会を説明する』を中心に検討しながら、現在において社会科学がどのようにあるべきであるかということを考えてい

バスカーは、「社会を自然と同じように科学することは果たしてどこまで可能か」(p.1)という問いを検討し、社会科学の哲学的探究を試みている。この問いに対する答えとしては、諸科学を科学として束ねるのは実証主義の原理であり、社会科学も科学である以上、自然科学と同一の原理に従うとする自然主義の立場がある。もう一方の立場としては、社会科学と自然科学の研究方法には、「越えがたい溝」があるとする反自然主義の立場がある。ここでは、解釈学の方法論が採用されており、社会科学においては、自然科学のように実在を実証的に明らかにすることはできないとしている。この二つの立場の間には古くからの論争があり、それらは現在の科学の方法論における研究に対して重大な影響を与えてきている。批判的実在論者であるバース・ダナーマーク、マッツ・エクストローム、リセロッテ・ヤコブセン、ジャン・Ch.・カールソンらは、その著『社会を説明する』の中で、これらの対立を「不幸な二元論」(p.5)と呼び、「あれかこれか的なアプローチ[*either-or approach*]」ではなく、「あれもこれもものアプローチ[*both-and approach*]」を採用すべきであると述べている。それは、単なる混ぜ合わせの議論ではなく、以前の様々な立場から得られた知識や洞察を保存しながらも、新しいパースペクティブという形で、ひとつの明白な対案を出そうという試みである。

バスカーは、実証主義と解釈主義の双方が共通に誤りを犯している点は、「自然科学に関しては基本的に実証主義の見方が成り立つ」(p.2)と認識しているところであるとして批判を行っている。そのため、実証主義の立場は、自然科学と社会科学の間には、方法上の違いは何もないという誤った認識に陥り、解釈学の立場は、社会科学を自然科学の間には違いがあるということ認識しながらも、社会科学を科学として正確に位置づけ直すことができているとしている。一方で、バスカーが提案する方法論とは、「基本的に実在論の立場に基づく、実証主義的でない限定された自然主義の見方」(p.3)である。つまり、自然科学と社会科学は同一の原理を有している部分もあるが、方法論上の異なりは存在するというのである。その上で、バスカーは、「そのような方法論上の違いにもかかわらず社会科学は科学として成り立つ」のではなく、「むしろ、そのような違いがあるからこそ社会科学は科学として成り立つ」(p.3)と主張している。

また、批判的実在論では、科学の目的について考える上で、人間がこれまで行ってきた「実験」という科学的行為に注目している。バスカーによれば、実験の意義とは、「何らかの事象の生起パターンを生み出すという点」にあると述べており、また、実験が成功したと言える状態は、「意図的にある特定の事象生起パターンが生みだされたとき」であり、それによって「当の科学者がその生起パターンに基づいて自ら生み出すことのない構造やメカニズムや過程の作用様式を同定できる」(p.10)ようになることだとしている。つまり、人間は実験活動を通じて、これまでに存在しなかった自然法則を生み出したり変化させたりするのではなく、「実際に起こる事象とは位相を異にする構造や生成メカニズム」(p.11)を捉えるのである。ダナーマークらも説明している通り、実在、つまり出来事を生起するメカニズムそのものを目には見ることができない。しかし、人間は実験という科学的な行為によって、それらを間接的に経験することができる。科学の目的とは、それによって出来事を生み出すメカニズムに迫ることであり、そのような「科学それ自体が実存の存在と性質についての証左」(p.35)であるとダナーマークらは説明する。

バスカーによれば、現実の世界とは、意図的に作りだされた実験的環境とは異なる「開いた系」であり、実験を通じて得られた知識を応用して、実践的に適用したとき、常に同じ現

象が認められるとは限らない。そのため、「因果法則と事象の生起パターンとの存在論的区分」をはっきりつけ、「実験や応用が知解可能なものである限り、因果法則は事物の傾向として分析」(p.11)されねばならないのである。また、科学が探求すべきメカニズムは、「それが現認されるか、ということとは無関係に存立・作用」(p.12)する「自動的 (intransitive) 対象」として捉えなければならない。それらのことを前提としたうえで、では、「科学的発見はいかにして可能なのであろうか」という問いが次に出てくる。そのことを考えるためには、先ほど述べた科学的知識の「自動的次元」、すなわち知識の「存在論的側面」と並んで、知識の「他動的 (transitive) 次元」すなわち知識の「社会学的側面」を明確に位置づけることが必要となる。自動的次元において、発見される何らかの事物は、発見という行為と無関係に存在しているため、科学的発見と発展は、他動的次元においてなされるのである。他動的次元における対象とは、理論や概念と呼ばれるものである。これらは可謬的であり、つねに修正に開かれている。これらが、より洗練されより説明力の高いものへと弁証法的に展開されていくことで、実存の次元のまで迫っていくことが科学の役割なのである。

ここまで述べてきたような、社会科学と自然科学において「知識生産を規定している原理」については基本的に同じであるとバスターは述べる。ただし、それらが分析すべき対象が異なるのである。バスターは、以下のように述べる。

「社会科学にとって大切なのは、社会という生活領域を織りなすさまざまな社会的構造に着目することである。つまり、事物の存在論に代えて構造の存在論を打ち立て、さらに、社会的個物が複雑な構造を備え時とともに変化していく存在物であることをしかと頭に叩き込んでおかねばならない」(p.23)(強調は引用者)

ここで述べられているように、社会科学の対象は、「社会的構造」である。また、社会科学の対象は、人間の活動と無関係には存在しえず、複雑な構造を持ち変化していく。これらの理由から、社会科学においては、自然科学のように実験を行うことができない。社会生活の領域において閉じた系が自生的に発生することはありえず、実験的に作り出すことはできない。そのため、バスターが述べるように「社会科学は開いた系で社会現象と直接向き合い、科学的探究を進めていかねばならない」(p.24)のである。

このような方法によって、社会科学が現存する社会構造を説明するとき、それ自体が現状に対する「批判」を含んでおり、社会的実践を行うものに対しても有用な知識を与えることができるという。ダナーマークらは以下のように述べる。

私たちが社会構造のメカニズムについての知識をもっているならば、私たちは観察している出来事の背後に作動する力を確定できるのである。そうすることで、私たちはまたさらに高度なやり方で、計画している行為がもつ可能性や欠陥や限界を評価できるのである。この種の知識がなければ、現象の分析は常に表層的なものかたとえ予測したとしても、すでに見たように誤ったものにさえなるだろう。(p.280)

当該の人びとの実際の状況や日常生活をよく見知っている者のみが、それらのメカニズム自身が特定の場面にどのように生起するのかを評定できるのである。そして、それができるために、実践化はその領域において重要な構造やメカニズムを特定化する社会科学の理論を使用しなければならないのである。(p.286)

現存する社会は、複雑であり、様々な場面で抑圧が行われる。そのような現象に対して、「なぜそのようなことが起こるのか」ということを論理的に説明することができるということは、その現実への批判と現実を「より良い」方向へ変化させていくための理論と実践に対する支持を意味する。このような意味において、実践に対しても科学は有用な価値をもちうるのである。

参考・引用文献

- ・ロイ・バスカー (1979) 『自然主義の可能性』(式部信訳 晃洋書房)
- ・バース・ダナーマーク マッツ・エクストローム リセロッテ・ヤコブセン ジャン・Ch. カールソン『社会を説明する』(佐藤春吉監訳 ナカニシヤ出版)

以上

.....

※なお、本先進プロジェクト研究 2015 年度研究報告書には付録として；

「特集 批判的实在論研究」を掲載している『立命館産業社会論集』（2016 年 3 月 第 51 巻、第 4 号 通巻 168 号）を現物で添付している。

同特集号の論稿は、

<http://www.ritsumeai.ac.jp/ss/sansharonshu/2015/514j.html/> から入手可能である。ご参照願いたい。

以上